

長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡
緊急発掘調査報告書

長野県東筑摩郡波田町教育委員会

1972' 3

関東農政局中信平農業水利事業所
長野県東筑摩郡波田村教育委員会

長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡
緊急発掘調査報告書

1972' 3

関東農政局中信平農業水利事業所
長野県東筑摩郡波田村教育委員会

序 文

古来波田村は、埋蔵文化財の多い所として知られておったのでありますが、村としての系統的な発掘調査等は行なわれないうまま、今日に至っておったのであります。

こうした時、中信平農業の周期的な事業として、中信平農業水利事業が行なわれることになりまして、その右岸幹線水路が新設されることになりました。

たまたま、この右岸幹線水路が、波田村麻地籍の、埋蔵文化財の多い地域を通過することとなったため、県教育委員会よりの指導と、関東農政局中信平農業水利事業所からの依頼によって、波田村教育委員会が、緊急発掘調査の作業を、実施することとなったのであります。

発掘調査に当りましては、松本深志高等学校教諭、藤沢宗平氏を団長とする10名の調査団員を委嘱申し上げ、9月15日より発掘調査を開始いたしました。

発掘開始以来、遠い祖先の生活の実態に触れる緊張感と感激を重ねながら、9月27日遺物の發掘を終了するまで、13日間の日時と村内多数の皆様御協力を頂いて発掘を終了したのであります。

その後調査団長藤沢先生以下各先生方の、格別なる御骨折りによって、ここに立派な報告書が出来上ることになりましたことは、誠に喜びにたえない所でございます。

私共は、この報告書が綴りかける遠い祖先の心に触れることのできる感激を、村民の皆様と共に大事にし、村民文化の発展に資したいと思うのであります。

ここに、関東農政局中信平農業水利事業所、調査団員の各先生、並びに関係各位に対し深甚なる感謝を申し上げ、序文といたします。

昭和47年3月31日

波田村長 太田徳雄

例 言

- 1 本書は中信平農業水利事業右岸幹線水路新設工事によりその一部を破壊される長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 本書は藤沢宗平指導のもと、調査員が分担執筆したが、全体にわたり藤沢が加筆・修正を加えた。しかし、調査後十分なる討議の機会をもち得ず、意見調整ができないまま印刷となったので、不十分な点が多いことをお断りする。
- 3 図版、挿図の作成は調査員全員があたったが、一部土屋長久氏の御協力を得た。
- 4 本遺跡出土品は、すべて波田村教育委員会の責任において保管されている。
- 5 本書の編集は藤沢が行なった。

本 文 目 次

序文	1
例言	2
本文目次	3
図版目次	5
挿図目次	6
第1章 調査	7
第1節 発掘調査に至るまでの経過	7
第2節 調査日誌	小林 謙 男 9
	宮 下 健 司
第2章 遺跡	13
第1節 遺跡の環境	13
1. 遺跡周辺の自然環境	藤 沢 宗 平 13
2. 周辺遺跡について	神 沢 昌 二 郎 14
第2節 遺構	17
1. 第1・第2地区の発掘経過	藤 沢 宗 平 17
	小 松 虔
	大久保 知己
2. 縄文式住居址	小 松 虔 22
	大久保 知己
第1号住居址	22
第2号住居址	24
第3号住居址	24
第4号住居址	24
第5号住居址	25
第6号住居址	25
第7号住居址	25
第8号住居址	26
その他の遺構	26

第3章 遺物	27
第1節 縄文式遺物	27
1. 土器(前期・中期・後期)	27
樋口昇一	
神沢昌二郎	
大久保知己	
2. 石器(石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・スクレパー 磨石・凹石・石皿)	36
中島豊晴	
篠崎健一郎	
3. 土製品(土偶・円盤・スタンプ状土製品)	44
樋口昇一	
第2節 弥生式遺物	47
1. 弥生土器	47
藤沢宗平	
第4章 結語	50
藤沢宗平	

図 版 目 次

図版第 1	第 1 地区発掘状況 (その 1)	55
図版第 2	第 2 地区発掘状況 (その 2)	56
図版第 3	第 2 地区発掘状況 (その 3)	57
図版第 4	遺構 (その 1)	58
図版第 5	遺構 (その 2)	59
図版第 6	遺物出土状態 (その 1)	60
図版第 7	遺物出土状態 (その 2)	61
図版第 8	遺物出土状態 (その 3)	62
図版第 9	遺物出土状態 (その 4)	63
図版第 10	遺物出土状態 (その 5)	64
図版第 11	遺物出土状態 (その 6)	65
図版第 12	縄文土器 (前期・中期)	66
図版第 13	◇ (中期)	67
図版第 14	◇ (中期)	68
図版第 15	◇ (中期)	69
図版第 16	石器 (石鏃・スクレパー・石匙)	70
図版第 17	土製品 (土偶・円盤・スタンプ状土製品・注口・底部)	71
図版第 18	弥生土器	72
図版第 19	弥生土器	73

挿 図 目 次

第1図	波田村遺跡分布図	15
第2図	第1地区近景	18、19
第3図	第1地区遺跡全体図	18
第4図	第1地区住居址実測図	19
第5図	第2地区遺跡全体図	21
第6図	第2地区各住居址実測図	23
第7図	縄文土器実測図と拓影—前期、中期	28
第8図	縄文土器埋藏実測図	31
第9図	縄文土器拓影—後期	33
第10図	縄文土器拓影—後期	34
第11図	第1地区出土石器—打製石斧・磨製石斧	39
第12図	第2地区出土石器—打製石斧・磨製石斧・礫器	40
第13図	第1・第2地区出土石器—石匙・凹石・磨石	41
第14図	第2地区出土石器—石皿	43
第15図	土製品—土偶・円盤・スタンプ状土製品	45
第16図	弥生土器拓影 その1	47
第17図	弥生土器拓影 その2	48

第1章 調 査

第1節 発掘調査に至るまでの経過

国営中信平農業水利事業が、松本平の農業に、一大変革をもたらす画期的な事業として着々進捗している時、右岸幹線水路開さく予定路線が、埋蔵文化財埋蔵地帯の、麻神地帯に当たった。

したがって、この麻神遺跡が破壊されることとなったので、遺跡の緊急発掘調査を行なうため、遺跡の記録を保存するため、長野県教育委員会の指導と、関東農政局中信平農業水利事業所からの委託をうけた教育委員会は、緊急発掘調査をすることとなった。

教育委員会は、爾来中信平農業水利事業所と連繫を保ちつつ、調査団の編成に当たった。

まず、調査団長として、長野県文化財専門委員で松本深志高等学校教諭の藤沢宗平先生をお願いして承諾をいただき、藤沢先生のお骨折りによって、10名の調査団員の先生方に御承諾を頂いて、調査団の編成を終えた。

事務局は、教育委員会の下に教育長を事務局長とする3名によって編成した。

この作業の推進に当っては、御多忙中にもかかわらず、欣然として御協力を頂いた沢木芳雄氏の御苦勞に負う所大なるものがあつたことを付け加えたい。

調査団並びに事務局の編成は、次のとおりである。

記

波田村文化財調査会組織

顧問	波田村長	太田徳雄
顧問	波田村議会議長	川澄勝雄
顧問	助 役	平林万亀雄
会長	教育委員長	大月英夫
副会長	委員長代理	志尾本 操
委員	教育委員	中野正吉
	〃	深沢清靖
	教育長	鎌田芳郎

文化財調査委員

百 瀬 尚 平

田 中 昭 三

事務局長 教 育 長

鎌 田 芳 郎

事務局会計主任 教育委員会主事

床 尾 政 尚

事務局現場主任

沢 木 芳 雄

波田村麻神遺跡調査団

団 長 長野県文化財専門委員

藤 沢 宗 平

調査主任 松本市日本民俗資料館主事

小 松 康 徳

調 査 員 松本市職員

神 沢 昌 二 郎

穂高高等学校教諭

中 島 豊 晴

筑摩高等学校教諭

樋 口 昇 一

国鉄職員

大久保 知 巳

長野県史刊行会参与

倉 科 明 正

大町市常盤小学校教諭

篠 崎 健 一 郎

明治大学生

小 林 康 男

宮 下 健 司

第2節 調査日誌

9月15日 水曜日 晴

午前9時より、調査団一行は、麻神（北）遺跡に参集し、藤沢団長から調査員の紹介、小松調査主任より、今回の調査に関する留意事項等についての説明会を持った。

その後、直ちに南北方向に2×34mのグリット列を東よりA～Dの4列に設定し（第3図）、それぞれを17区に分け、人員の関係もあって、まずDグリット列を迫ることとする。

各区とも耕土層（20cm）、その下の含礫土層（10cm）は明治23年畑地を水田に転換する際、人為的に他所から運搬された土層であるためか遺物はほとんどみられない。遺物包含層である第3層の黒色土は、約30cmの厚さをもち、若干の礫を含む。遺物の出土量は全体に少なく第10～12区にやや多い程度である。

午後はDグリット列を2×18m間に延長し、発掘を進める。縄文中期、後期の土器片に混って弥生式土器片が若干出土する。

9月16日 木曜日 晴

第1地区における遺物の出土状況が悪いため、7330番地の2を第2地区としてトレンチを設定する。

第I地区 Dグリットの第2・3区、第10～12区の焼きを行うと同時に、出土遺物がやや多かったD10～12区の東にC10～12区を拡張し、掘り下げを開始する。この結果、D2・3区は午前中に砂礫層に達し作業を終了したが、後期の土器片、打製石斧が出土。C10～12区は、D10～12区と同様の地層状態を示し、第3層の黒土層から縄文後期の土器を主体として出土。このC・D10区には東西方向に排水のための暗渠が検出され（第4図）、この集石列付近から多数の打製石斧が出土し、D23区では弥生時代中期の土器がややまとまって出土した。なお、D10～12区にベルトコンベアをいれる。

第II地区 第I地区より東南へ200mほどの地点に、東西方向に2×32mのAトレンチ（以下Tとする）を設定し第I地区と名称を区分する（第5図）。次いで、第1区と第2区以下は偶数区を発掘開始したが、遺物の出土は極めて僅少であるので、途中より1m巾の発掘に変更する。午前中に各区ともローム層に達し、ATでの作業を終了する。出土遺物は加蓋利E式の土器片が第2区、第4区、第12区に少量みられたのみであった。

午後、ATの北方に南北方向のBT（1×22m、11区画）を設定し、（第5図）北端の8～11区までの掘り下げを始める。この結果、耕土層約27cm、その下に黒色土が18cm焼き

褐色土になる。この第2層の黒色土直下あたりから褐色土にかけて勝坂式・加曾利E式土器が非常に多く出土する。

9月17日 金曜日 曇

第I地区 拡張区C10~12区を昨日に引き続き進め、それが完了したのち、更にD10~12区の西側にE10~12区(2×6m)の拡張を行なう。このC・D・E10~12区の調査によって、D11区に検出された焼土を中心とする平地式住居(?)が確認されたが(第4図)、その輪郭等ははっきりした規模は不明である。また、D11区の東寄りにピット状の落ち込みがみられ、そのピット上から凹石・磨石、ピット内から獣骨片・木炭片・縄文後期土器片が出土した。E10~12区では第2層から縄文後期土器片・打石斧・石鏃・スクレパーなどを検出した。昨日、発生土器が出土していたD24区は、10~20cmの包含層を確認したが、同時代の遺構は何も検出されずに終わった。

第II地区 BT8~11区の掘り下げを継続する第9区では褐色土を除去した所、地表下90cm面に、住居址の壁がみつき、これを第1号住居址とする。同住居址の北壁を検出するためB12区を新設し、掘り下げると、第1号住居址の北壁と共に更に隣接する第2号住居址の一部及び第2号住居の南壁近くに風竈を発見する。(図版第5)

第1号住居址は、BT第9~11区を中心として、その東西に及ぶものとみられるため、BTの西側に2.5×6mの拡張を行ない発掘にかかる。第1号住居上層からは勝坂式・加曾利E式土器が混在して出土し、第10・11区からはやや加曾利E式が多いようである。BT拡張第9区で、50cmの面に焼土を中心として勝坂式土器、打製石斧・凹石が多く出土し、この面が一つの生活面(第8号住居址)と考えられる。しかし、褐色土層中ということもあり、その範囲・規模等については明らかでない。

9月18日 土曜日 雨

昨日の夕方から雨が降り続き、朝になっても止みそうにないので、被田中学校にて、出土遺物の水洗い等、整理を行なう。

9月19日 日曜日 晴

日曜日なので、梓川高校・被田中学校生徒の参加もあり、作業はおおいに進む。

第I地区 DTの第1号住居址を中心として清掃仕上げをし、午後からD・Fグリットの南北・東西セクションを作成する。

第II地区 朝、ベルトコンベアーを設置し、作業の効率を計る。BT及びその拡張区の作業を続行すると同時に、既設のBTに直交する1×36mのトレンチを設定し、これをCTと名づけ(図版第2)直ちに発掘を開始したが殆んど遺物の出土がみられず、また、道

構らしいものも検出されないで、午前中で調査を打ち切りとする。

さて、B Tでは、第1号住居址に付属する炉址（炉址内から少量の骨片出土）が検出され、その横に石皿が伏せた形で発見される。床面上からは遺物の出土は余りない。B T拡張第8・9・10区の調査はローム面まで掘り下ると、第8区のローム直上に焼土が認められ、この焼土を切るような形で第8区・9区にまたがり第3号住居址が、両区の高壁に接して半月状に姿を現わした。（図版第2）この住居址の壁上・壁外には木炭が多く見られた。更に拡張第10区からは住居址の床面が現われ、加蓋利B式土器片などが出土し、この住居址を第4号とした。（第6図）午後B Tに併行して、その西側に4 m離れてD Tを設定し、掘り下げを開始する。

9月20日 月曜日 曇

第I地区 第1号住居址の平面図、エレベーション図を作り、午前中で第I地点での調査を全て終了する。

第II地区 B T及びB T拡張区内の各住居址の仕上げをする。その際、各住居址に伴う柱穴と同時に、第1号住居址の北東隅に埋蔵が発見された。（図版第5・9）

D Tを東西に各2 m拡張し、その結果、D Tは6×12 mの大きさになった。D T拡張区第5区の褐色土層中（-50cm）に焼土が検出され、この同一レベル面から磨坂式土器、打製石斧・石匙・凹石が出土し、この面を一応生活面であると考え、第5号住居址とする。しかし、この住居址の性格は明確ではなく、遺物、焼土の図を取り更に掘り下げると、7層の平石を用いた石組み炉が検出され、これを第6号住居址とする。（図版第4下）

9月21日 火曜日 曇のち雨

第II地区 D Tでは昨日の夕方検出された石組み炉に伴う第6号住居址を明確にするため、第3・4・5区とそれぞれの東西拡張区の発掘を継続し、床面と推定される範囲を掘り終える。この結果、この住居址は褐色土層中に構築されたものであるため、南壁がわずかにみられたのみで、柱穴らしきものも確認できなかった。遺物としては加蓋利B式土器と打製石斧・凹石が出土した。

一方、第3区の東壁に沿って、南北方向にほぼ直線にのびる土壇状ロームの盛り土が確認され、第6区からは、磨坂式土器が褐色土層中に、おり重ったような状態で夥しく出土した。

午後は第6号住居址の作業を終了してから、第3号住居址究明のためB・D T間の盛り土の除去を行なう。一方、既に発掘が終わっているB T内の遺構（第1～4号住居址）の平面図、エレベーション図をとる。

9月22日 水曜日 雨

朝、作業を開始した際は、曇り空であったが、10時頃になると雨が本降りになってきた。しかし、調査区域の上に大天幕を張って雨を防ぎ、調査を続ける。また、波田中では、本日より倉科調査員が中心となり、出土品の水洗いを実施する。

第3号住居址を完掘すべく、昨日あらかじめ盛土を除去したB・D Tの間にF・G T（各2×6m）を設置する。この区に調査の全力が投入され、夕方までには、第3号住居址完掘まであと一歩となった。

G T第8・9区、F T第8区では、褐色土層中（一45cm）にロームが部分的に存在する状態が認められた。このローム層中からは、余り遺物が出土せず、ローム層下には、また褐色土の堆積がある。

これらの層の記録をとったのち、第3号住居址の覆土の除去にかかる。この覆土には木炭がたくさん認められた。床面上からは前期最末期と思われる土器（第7図1・2）が二個体分出土し、そのほかの遺物としては、加前利B式土器が多く、また凹石が15個ほど出土し注目された。他には打石斧・石皿・石匙・土偶・土製円盤等、遺物は非常に豊富であり、第3号住居址の輪郭がはっきりしたところで（図版第4）本日の作業を終了した。

9月23日 木曜日 晴

第3号住居址、D 6 Tの調査を行ない、D第6区からは勝坂式土器が非常に多く出土し掘り下げるに従い、第6号住居址の下に、もう一軒の住居址が確認された。（図版第4）

第3号住居址は住居址内に埋積しているロームの状態を記録したのち、それを除去し、床面、柱穴等を出し、本住居址を完掘する。床面からは前期最末期の土器、石鏃（2）、打石斧（1）、スクレパー（1）が出土した。その後D T 4の平面図、エレベージョン図の作成にとりかかり、日没のため未完成となる。

9月24日 金曜日 晴

午前中、昨日の続きである平面図を作成し、午後は波田中学校にて、出土遺物の整理にとりかかる。

9月25日 土曜日 晴

波田中学校にて、出土遺物のナンバーリングを行なう。

9月26日 日曜日 晴

波田中学校にて、出土遺物の分類、土器整理を行なう。

9月27日 月曜日 晴

昨日と同様遺物整理を行ない、一応夕方終了とする。（小林康男・宮下健司）

第2章 遺 跡

第1節 遺跡の環境

1. 遺跡周辺の自然環境

本遺跡は、地籍上、長野県東筑摩郡波田村7270番地～7330の1～2番地に属する。

なお、地形上、松本平の南部に属して、西部山地の東側に展開する唐沢川扇状台地の扇頂から扇尖に至る部分にある。

西部山地の前山、1773m・1600mの高地にその原を発する唐沢川は、山形村と波田村の村界付近を流れて扇状地を形成し、唐沢川そのものは、今日では、山形村側の山際を流れて唐沢部落を潤し三間沢川に入っている。

波田村側の山際を流れる小流は、元来、唐沢川扇状地の扇尖を流下したと思われるが、今日では、山際を北流し中・下波田部落を潤し、その後、梓川から分派した波田堰に流入し、下原を潤している。扇尖及びその付近は、今日では、幾つかの堰によって潤されているが、縄文期には、唐沢川ないし小流によって、僅かに、潤されていた地帯であって、唐沢川の水量の減少とともに、本来、扇尖の持つ乾燥地帯という性格が一層強くなり、畑地帯となったもので、畑地帯に交錯してみられる水田地帯は、専ら堰のできあがるとともに形成されたものだろう。

この地域の縄文文化の成立が縄文文化の前期末ないし中期初に求められること、後期後半以降の縄文遺物を欠くのは、専ら、唐沢川ないし小流の消長と深い関連をもつものと思われる。この地域では、初期の弥生土器と思われる遺物の存在は、未だ、その生活遺構が発見されていないので、何んともいえないが、やはり、唐沢川ないし小流の消長と関連をもつものと思われる。

中沢や上波田に属する山際に湧水し、それが上波田部落内外の遺跡を残し、その湧水が下波田所在の遺跡を潤すこともあったと思われるが、元来は、唐沢川ないし小流に沿って縄文人の生活があったと思われる。遺構は未発見であるが、弥生土器の発見は、やはり、弥生人の生活を考えない訳にはいかない。それも、その湧水によったものだろう。

(藤沢宗平)

2. 周辺遺跡について (第1図)

波田村は多くの遺跡にめぐまれているが、麻神遺跡をめぐる周辺遺跡について、梓川右岸の波田・山形村を中心に一瞥してみたい。

縄文時代早期の遺跡はほとんど発見されず、ただ、山形村の神明第2遺跡から、早期末に似た指圧痕のあるせんべい土器が出土している他、波田村寺林、山形村唐沢、神明第2の各遺跡より出土している織籠を含む土器に早期らしいものがかがえるだけである。縄文時代前期になると、かなり遺跡数は増して、前期初頭では山形村の淀の内、唐沢西遺跡、神ノ木式土器と類似したものを出土している遺跡では波田村寺山と神明第1遺跡があげられる。前期末中頃では踏籠式土器を出土している波田村の下原・下島、それに唐沢と、唐沢川上流の美野里ヶ丘第2遺跡などがあげられ、更に前期終末では唐沢、神明第2遺跡が数えられる。しかし、これらの前期遺跡のうち、住居址が判明したものは唐沢遺跡だけである。

縄文時代中期に入ると、遺跡の数は急激に増え、中期の初頭では波田村中下原・下原、山形村粒沢・堂村などの踏籠遺跡があり、中期中頃の踏籠式土器を出土する遺跡では、波田村では、寺山・古城・下原・下島・上野各遺跡の他、山形村では弱・淀の内・野原・堂村・殿村第1・殿村第2・三夜塚・三間沢川右岸の各遺跡が主なところである。更に中期後半の遺跡としては、古城・下原・三間沢川右岸の三遺跡を除いた前記遺跡と、波田村の兼原・森口南村と、山形村盛・橋手ヶ崎・ヨシバク・宮村の各遺跡を加えたもので、この他波田村の上海渡・水沢田・廻ノ内・山道中筋・寺山の各遺跡でも中期の土器が出土している。しかしこれらの遺跡は耕作中、または工事等の際に発見されたものが多く、発掘調査をなされた遺跡は弱・三夜塚・兼原の三遺跡のみである。

縄文後期に入ると、遺跡はぐっと減り、後期前半では兼原・下島両遺跡の他、粒沢・高村・三夜塚の踏籠遺跡、また縄文晩期では、波田村水沢・上海渡両遺跡があげられる。

以上のように縄文時代においては、中期が圧倒的に多く、朝日村鎮川左岸段丘上の熊久保遺跡、山形・朝日村境の洞遺跡、山形・波田村境の三夜塚遺跡と、いずれも大集落を構成していた遺跡であり、波田村でも梓川右岸段丘上の敷石住居址を発見した兼原遺跡などが、特記されるものである。

弥生時代に入ると、縄文後・晩期よりはやや遺跡数が増加するが、それでも遺跡は少なく、波田村では百瀬式土器より時代のさかのぼるものを出土している遺跡は、上海渡・下波田中村・下原・森口南村各遺跡で、山形村では、棚目波状文土器を出土した洞、布目渡

波田村遺跡今年圖

1上海渡、2小峯、3青山、4男女沢、56北前、
 7南栗、8盛家寺、9古城、10社宮司、1112古木、
 13曾邊津、14新田、15上新田、16甲下、17原林、
 18南村、1920中村(武村)、22五丁、23後現、
 24尾形、2526林崎村、27御前、28新田、
 29宮地、30上野、31栗原、32栗原、33上野、
 34南原、3536下原



の底をもつ土器を出土した北竹原第2地点の下大瀬中町立道西・官行塗林・唐沢各遺跡などであり、松本市神林の山形村境の境塚遺跡からも弥生中期初頭の土器や太形鉛刃の磨製石斧を出土している。

この他遺物について主なところをあげてみると、土製耳飾は上郡渡遺跡の水沢田から直径6cm、厚さ1cmのものが出ており、古城遺跡では帯車状耳飾が出土している。他に高村・神明第1遺跡でも出土を見、三夜塚では耳栓が発見されている。土偶は中期の遺跡から出土している例が多く、古城・山道中筋・澤原・三夜塚・堂村・山形村寺林・巖村第2・洞の各遺跡から出土している。また麻神遺跡の僅か北西の中村遺跡からは、国立博物館蔵の土面が出土していることは有名である。更に土鈴は下原より一ヶ所出土している。石製品についてみると、石棒は中下原・寒原・石原田（山形村）・古城・中町立道西・窪・唐沢・美野里ヶ丘第1・三夜塚の各遺跡より出土を見ている。石皿は中下原・廻ノ内・中町立道西・石原田・神明第1・三夜塚・洞・美野里ヶ丘第2・唐沢遺跡などより発見されているが、特に唐沢出土のうちの一つは渦巻状の文様のほられたものである。勾玉は山形村の北竹原第1・三夜塚・廻ノ内各遺跡から採集されているが、三夜塚遺跡のものは石材はヒスイと滑石である。この他神明第1遺跡では滑石製品が、同第2遺跡では球状耳飾の出土をみている。

以上、麻神遺跡の周辺遺跡と特記すべき出土遺物などを列記したが、本遺跡は唐沢遺跡に近く、また三夜塚・下原同遺跡とも同類土器の出土をみているなど、これらとの関連を思うときこの遺跡の存在が重要な位置を占めるものと思われる。（神沢昌二郎）

第2節 遺 構

1. 第1・第2地区の発掘経過

(1) 第1地区(第2図・図版第1)

現在、水田となっているところにグリットを設定し、東から西にA～Dグリット列と名付け、2×25mのDグリット列のうち、0～5区、8～13区、19～21区、23～25区に分けて発掘を実施する。(第3図)

本地区は、南西から東北に緩傾斜をなし、そのような地形に水田を作ったため、階段状の地形をなして、19～21、23～25の両区は上段に、8～13区は中段に、0～5区は下段に位置している。その各比高は、1m前後をなしている。

0～5区地層は、耕土(30～35cm)・黒土(65cm前後)・褐色土・砂礫とつづき、南から北に層位が僅か傾斜している。遺物は、耕土中にも出土するが、第2区によれば、その主体は、黒土と褐色土の境界付近(地表下50～60cm)、黒土層の最下層に出土する。黒色土層から後期、褐色土層からやや中厚手のもの(後期初のものか)、打製石斧など出土。遺物の多くは南に出土し、北には少ない傾向を示し、その内容も、後期土器の小片である石器としては、0区にチャート製石筥の出土が目立つたのみであった。

8～13区 第8・9区では、包含層は16～22cmで、後期土器片が出土し、第13区では中期土器が概して多く、第11・12区付近、打製石斧の出土が目立ち、97点を数える。縄文土器も、加蓋利E式位の中期末のものから、後期初頭に比定されるもの、船之内式・加蓋利B式など、後期中頃のものまでが一層に出土し、その出土状態は整然としていない。地下50cm前後に平たい円石、炉と思われる焼土、その南に大土器片が幾つかに割れているが、この少し上位までは運土ではないかと思われる。礫を混じえた褐色土の一部に、やはり礫を混じえた黒土が存在し、その範囲は南北約4.80m、東西約4.30mが計測されるので、これがある時期の堅穴住居ではないかと思われる。(第4図)褐色土への落込みは少ないので、褐色土の上層の黒土層が当時の生活面ではなかったかと推測されるが、出土遺物は、加蓋利B式・船之内式・加蓋利B式に類するものなので、そのいずれに属するものか、また、仮りに、その住居が一形式だけに属するものとすれば、他の二形式の属する住居は、他にもあるのかなどはわからない。

19区～21区(図版第1) 第19区から後期初頭に比定されるもの、中期末と比定される土

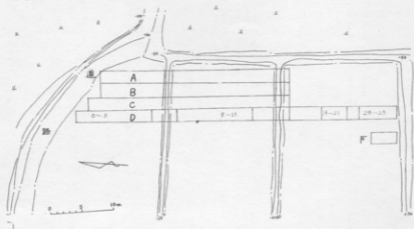
第2図 第1地区近景(北より)



器も、黒土層中に出土する。ここでは、黒土層上部に黄土が層をなしてはいるが、ある間隔をおいて存在し(図版第1)、水田を作るために盛土をしたことが明らかである。第20・21区から弥生土器が出土し、殊に、条痕文土器を混じえているので、事の意外に、いささか驚く。

23~25区 第23区の土層断面によると、耕土・黄色土・黒色土・褐色土とつづく。ただし、黄色土は、第19区と同じく、層をなしていてもつづかず、ほぼ、同じ位の量で切れているので、運土であることは確か。遺物は、黒色土層中から出土し、この層は動いていないらしい。ただし、第24区では、黄色土層中から凹石・厚手土器が出土し、黄色土層下の黒色土層上部からも加蓋利E式土器が出土し、これも、黄色土とともに運ばれたのではないかと思われる。黒色土層が遺物包含層で、褐色土層からも出土し、第24・25区では、褐

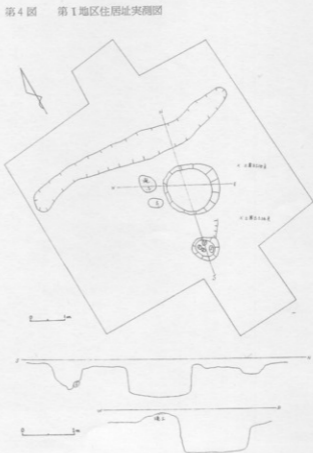
第3図 第1地区遺跡全体図





色土層に不整形ピットが出土し、弥生土器は、その周辺から出土した。

結局、第1地区は、緩傾地に運土して均らし、水田を作ったために、地層の層序も一様でないが、基盤は砂礫層で、その上に褐色土・黒色土がつづき、その上に黄色土・黒色土が運ばれて水田の床がつくられたらしい。遺物は、下段・中段では、縄文期中期末ないし後期中ごろのもの、上段では、弥生期のものがこの



地点生え抜きのものではないかと考えられる。

Fグリット 土器の細片が微量出土しただけで、余り、期待がもてないため、西への発掘地点の拡大は中止する。(藤沢宗平)

(2) 第2地区 (第5区)

第2地区は、調査区域のうちでは、普通作畑であり、調査が容易であるとともに、第1地区に対し、南部地域としての様相の違いや遺物もかなり変採されており、第1地区の出土遺物が余り豊富でもないため、発掘地点として選ぶこととした。

現場は、西の山麓からつづく緩斜面であり、表土も褐色土・黒色土・褐色土・ローム質土壌となり、最上部の褐色土は、西方からの流れにより堆積したものと恐れられ、調査地域全域が、ほぼ、この層序であり、第1地区よりは自然のままであり、土は動いていない。

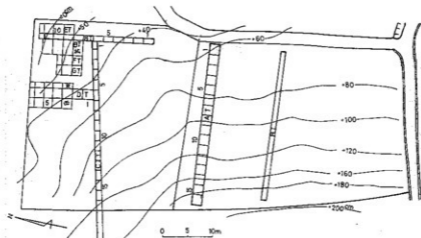
最初、A・Tが巾1m、長さ32mに設定され、2m毎に区切って東より第1区～第16区の順とし、調査は、偶数区が掘り下げられ、遺物は、縄文中期の土器片が第2区2片、第4区8片、第12区6片と発見され、他はみられなかった。

B・Tは、この東に縄文土器などの遺物の散布する桃畑があり、その付近の様子を知るために、南北に、巾1m、長さ22mに設定し、南より2m毎に区切り、第1区～第11区の順とし、さらに、その後、北へ延長して第12区を設ける。

調査は、第8～12区に実施し、表土約25cm前後で若干の土器片などを含み、第2層は黒色土約25cm、層間に焼石及礫などまばらに含み、勝坂式・加蓋利B古式類似土器などを多量に含んでいた。第3層は、第2・第4の漸移層で約10cm前後、同種の遺物を含んでいる。第4層は淡褐色土層約30cmで、遺物出土状態は上層と変わらない。以下ローム層につづいている。出土遺物は、打製石斧・磨石・凹石など、遺構としては、第10・11区の地表下90cmに第1号住居址の床面1.75×1.65m、深さ37cmの竪穴炉出現し、(図版第3)第9区にはその南壁らしきものを認めため、第12区を調査し壁高15cmの北壁を確認した。この北壁より北へ60cm離れて第1号住居址と同レベルに第2号住居址の床面を検出し、この床面の南壁近く加蓋利B式類似の遺物を発見した。(図版第5)

次に、B・T西側へ隣接して巾3m、長さ8m拡張し、南より第8～第11区とした。その第9区では、地表下40～50cm面に、68×75cmの範囲に勝坂式・加蓋利B古式類似土器片が散乱堆積し、焼石や小礫の混入をみた。石器は、打製石斧・磨石・凹石などが出土した。第3層は、淡褐色土層で、第8・11区が比較的薄く、第9・10区は最も厚い堆積を示していた。遺物は、勝坂式・加蓋利B古式類似土器が混在するが、下方にいくに従い少なくなる傾向をみせる。第4層は混入ローム層、第5層は、第3号住居址の床面真上でのみ

第5図 第2地区遺跡全体図



認められるもの、遺物包含は木炭の他、数片の土器を数えるにすぎない。第6層はローム層となっている。なお、第3層内の石器に、打製石斧・凹石を検出する。

遺構としては、第9区の地表下50cm、第3層上層面に、東西方向に断続する焼灰の推積4箇所を確認した。その1は、35×40、層の厚さ7cm、その2は、10cmの間隔をおいて西に、33×35cm、厚さ10cm、その3は、10cm西へ離れて20×30cm、厚さ10cm、その4は、第3に接し、20×40cm、厚さ15cmの規模であった。

この層は、生活面と考えて差支えないが、住居址と考えるには資料不足であった。なお第8区には、地表下75cmのローム層直上に45×55cm、厚さ13cmの焼灰の推積を確認した。第3号住居址の一部が第8・9区に出現する。(図版第2)

次に、B・T東側へ、これと平行させて、巾2m、長さ4mのトレンチをつくり、第10・11区とした。層序は、第1層(約30cm前後)・第2層(約20cm)・第3層(約10cm)・第4層(28~30cm)、地表下90cmで第1号住居址の床面に達する。床面には1個の埋栗が逆位にある。(図版第5)

B・Tの西拡張区の西側に隣接させ、巾2m、長さ4.75mのトレンチをつくり、第8~第10区とした。層序は、第1層(15~28cm)・第2層(14~25cm)・第3層(45~57cm)・第4層以下は、第3号住居址のところで述べたものと同じ。第2層に、遺物は最も多く加奇利B式を主に勝板式を従に、石器では打製石斧・磨製石斧・凹石など出土した。

次に、上述トレンチの西に隣接して巾2m、長さ4.95mのトレンチをつくり、第8～第10区とし、層序は、第1層(20～25cm)・第2層(10～20cm)・第3層(55～60cm)・第4層として上述の混入ロームが出現する。第8・9区の地表下38～40cm面に、加普利B式類似の係体を別にする土器片が密に集積している。その範囲は、65×70cmに及んでいる。なお、第9区内の地表下47cm面にも、径80cmの範囲に加普利B式土器片が集中出土している。

このような小トレンチ調査の積み重ねによって、第1号住居址、その北に第2号住居址の南西隅、第3号住居址の全容、第4号住居址の東半分などが露われた。(図版4)

C・Tは、B・T第6区の西側から西方に、巾1m、長さ47mが設定され、2m毎に区切り、東より第1区～第24区とした。(図版第2)調査は、第6・8・10・12・14・16区がなされ、遺物は、第16区で中期弥生土器が発見された。

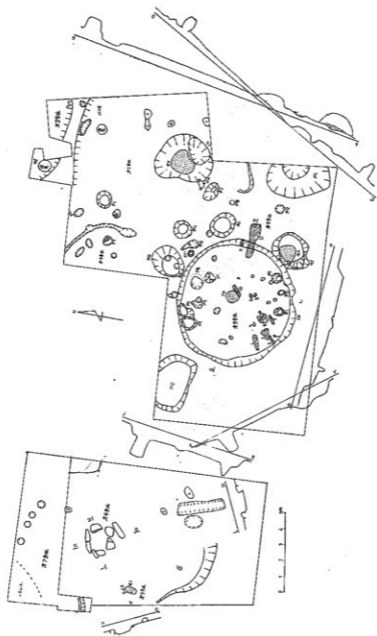
D・Tは、B・Tの西側の様相を知るために、巾2m、長さ10mのトレンチが、C・Tの第6区より北に向けてつくり、南より第1～第5区とした。このトレンチの調査中、第5区より石組の炉址を発見し、第3区から東と西に拡張し、東側は巾1m、東拡張部D3～D6とし、西側は巾2m、西拡張部D3～D6として調査した。この炉址の上層と思われるあたりで勝坂式土器を主体とする土器の集積をみた。調査は、さらに、この北側に1m拡張して行われ、上述炉址の下層に、やはり、床面が焼けていて、その上に勝坂式土器の集積するのが観察された。(図版第9・10・11)(小松康・大久保知己)

2. 縄文式住居址

(1) 第1号住居址(第6図)

本址は、BT第11区で床面が確認され、東側にはET(2×4m)、西側にはBT拡張部(3×8m)を拡張して調査された。第6図にみる大形の竈穴炉をもち、南壁は、炉の南端より1.2m離れて高さ13cm、北壁は、炉の北端より4.4m離れて高さ15cm計測される。なお、炉址の西南の縁に石組が伏せられた形で残っていた。東壁は、ETの設定だけでは確認されず、なお、東につづいて未確認である。西壁は、第4住居址と重複して消失し、明確には、両者の境界を分ち難い。なお、南・北両壁とも、その一部を確認したにとどまり、全体のプランは、必ずしも、出たわけではなく、その怪も、南北の確認された壁によると5.3mを計測し、おそらく、6.70mを径とする円形プランではなかったかと推測される。炉址は、上面の径1.65×1.75m、深さは3段階が認められ、最深部は床面下43cmである。床面は、南から北に15～20cmの高低差を示す勾配をなしているが、固く仕上げられている。また、北壁に近く(60cm)加普利B式中層類似土器の煙突が1ヶ確認された。底部

第 6 图 第 2 地区各柱位出土器物图



を打欠いたと思われ、これを欠き、倒壊に伏せてあった。(第8区・図版12の24)床面直上の遺物としては、主に、加前利B式類似土器片を検出する。なお、平面プランは、岡村葦原遺跡の同様な炉址をもつ住居址と似ており、隅丸の円形に近い方形のプランとも考えられる。この外の出土遺物は、打製石斧・磨石・石皿などであった。

(2) 第2号住居址

本址は、第1号住居址の北壁を剛認するため、第12区としてトレンチを延長した部分を発掘中に発見したものである。第1号住居址とは50cmの間隔をおき、壁高は20cmである。床面のレベルは、第1・第2住居址ともに、ほぼ、同じ位である。本址の南壁に近く、加前利B式中床類似土器の埋輪1個を剛認した(図版12の25)。調査は、この地点が調査対象地域の限界にあるために、残念ながら、中止せざるをえなかった。推測ではあるが、径5m位の円形ないしそれに近い平面プランをもつと思われる。

(3) 第3号住居址

本址は、第1号住居址の周壁・柱穴など追求のため設けられたBT拡張区の発掘によりその一部が発見され、最終日に、ようやく、その全容を剛認したものである。本址は、地表下1.1mに床面があり、その平面プランは、東西3.50×南北3.30mの円形竈穴で、壁高は、東・南・西の三面が40cm、北壁は25cmである。床面は、東が西に比べて5cm高い。なお、床面には礫があり、あまりよい面ではない。床面のほぼ中央に径34×36cm、深さ8cmの円形炉があって長石が一侧にのみ残っている。最初は、石囲い炉であったものだろう。柱穴は、南側にP1・P5、北側にP2・P8が支柱穴と考えられ、副柱穴には、上述柱穴の中間にある南のP10、北のP9が考えられる。北側のP6・P7は補強用の柱穴ではなかったろうか。P6はP2、P7はP8の副柱穴のものと考えたい。なお、P8は、斜に上部を西に向けて掘られている。

床面には袋状ピット(上面径43×50cm、下面径39×42cm、深さ80cm)1箇の外、径10~15cm、深さ20cm前後の浅いものが多い。なお、床上に散乱する炭化材は、1-5×10cm、2-5×40cm、3-26×36cm、4-10×50cm、5-8×14cm、6-20×26cm、7-6×3cm、8-6×12cm、9-8×13cm、10-10×40cm、11-10×22cm、12-20×30×110cmなどである。さらに、柱穴の大きさをみると、P1-25×30cm・深さ45cm、P2-40×50cm・深さ44cmと55cmの2段、P3-20×31cm・深さ25と45cmの2段、P4-20×21cm・深さ47cm、P5-30×31cm・深さ57cm、P6-25×41cm・深さ45cm、P7-30×31cm・深さ20cm。

(4) 第4号住居址

本址は、第1・3号住居址と切合い、BT拡張区の第11区に発見される。西と北側が未

瓶なので、全形の詳細はわからない。陶器と思われるもの（巾10cm、深さ9cm、長さ2.2m）が東北隅に僅かに残っているので、円形ないし円形に近い平面プラン（4.0×3.2m位）が予想される。なお、P1が溝の中央よりやや南にあり、中に石が1個ある。本址の区域内より出土した土器は、勝版式が少量で加留利E式のものが多く、おそらく、後者が本址の残したものであろう。

（5）第5号住居址

本址は、DT4の西に発見され、DT4西拡張区の中央の焼土を中心に考える遺構である。第6図でみる焼土は、20×40cm、厚さ10cmあり、この焼土の下に径20cmの土器の底部があり、炉址の火壺ではなかったかと考えられる。なお、褐色土層中につくられた堅穴住居のため、正確な範囲を握むことはできなかった。

（6）第6号住居址

本址は、BTに平行して設定されたDT第5区に石組の炉址が発見され、これを中心に推定する住居址である。BTの西側に第4号住居址と関連する遺構の有無を明らかにする目的での調査なので、最初、DTの第4・5区から掘り下げられ、第5区に石組み炉址を発見し、これを中心に調査が進められ、東と西に拡張された。

炉址の南3mのところ、側壁と認められる落込が発見され、西にのびるに従って緩い斜面となって消え、東側も薄れてしまい、確認されたのは2.5mの間であるが、これを南側の壁としたい。炉址の北は、その北端から70cmで土層が変わり落込み、第7号住居址となった。

石組みの炉址は、南北の内径48cm、東西の内径55cmで、石組の個々の石は割れているものもあるが、炉址そのものはあまり焼けていなかった。なお、この住居址も、褐色土層中に埋れているために、正確なプランを確認できなかった。

このような、ローム層内に掘り込んだのではない堅穴住居の詳細な調査は、緊急調査では時間的にも、気分的にも無理らしい。なお、調査の途中で、この住居の床土を少しく浮いて、勝版式類似土器の新しいものが燦然して発見されたが、夕方のために、撮影がうまくできなかったのは残念である。この住居もおそらく勝版式に属するものであろう。

（7）第7号住居址

本址は、第6図でみるように、第6号住居址の西に側壁の一部が発見され、両面もあり床積は同じ。東壁は、発掘した範囲では確認できなかった。柱穴と思われるものも出ているが、第6号住居のものか、その他のものか、その区別ができない。床面と思われる圍い面の西端に、床面直上から多くの勝版式類似土器が燦然し、本遺跡では、上述の第6号住

居址に発見されたものと2例である。

今回の調査でも、その原因などは追求できなかった。勝板式類似土器が主体であるが、加曾利E式類似土器も混入しているらしい。この住居は、おそらく、勝板期のものと考えよう。

(8) 第8号住居址

本址は、褐色土層中にあるため、そのプランなど不明であり、果して住居と考えるとよいかどうかはわからない。BT拡張区第8のほぼ中央に焼土を発見、これを伊址とするならば、第8号住居址を考えることができる。この焼土の面に多くの勝板式土器の破片が出土し、住居址と推測したのである。なお、勝板式土器のうちには、底部を欠いた壺形土器が倒立状態で発見され、大体、地表下40~50cmに68~75cmの範囲に多量に勝板式・加曾利E式の古いものが出土し、石器では、打製石斧・磨石・凹石などが出土している。

第7号住居址は別として、第5・第6住居址などは、この住居址とともに、褐色土層中に形成された竪穴住居らしく、この地域では未だ確認されたものは殆んどないが、1地点で3例は多い方ではないかと思われるとともに、上述のように、このような状態の竪穴住居の内容を明らかにしたいものである。P17・P18は、ローム面には小さな凹みであるが上層の褐色土層より、通じているもので、この住居の遺構ではないだろうか。

なお、本址は、勝板期から加曾利E期への移行期のものではないかと思われる。

(9) その他の遺構

第2地点の不明で追求しきれなかった遺構について記したい。

第6区でみる第6号址の南に土手状の遺構があるが、この遺構は、東側が急な傾斜をなすローム質土を盛ったもので、褐色土層中にあり、第6号址の床面からは7cm高く、底辺は40cmあり、盛土の高さは37cm、ほぼ、南北に1.35mの長さがある。竪穴住居の副坑の一部ではないかと考えてみたが、解明できるまでには至らなかった。

BT第8区のP11は、今回調査された何れかの遺構につくものか、未調査区域の中にある遺構に付属するものか判らない。

第3号址の東側の壁外上にあるP13~P17のピットも、周囲の何れかの遺構につくものか、調査者たちの気づかずに見逃した褐色土層中の遺構に関係しているものか判然としないうちに終わってしまった。

第3章 遺物

第1節 縄文式遺物

1. 土器

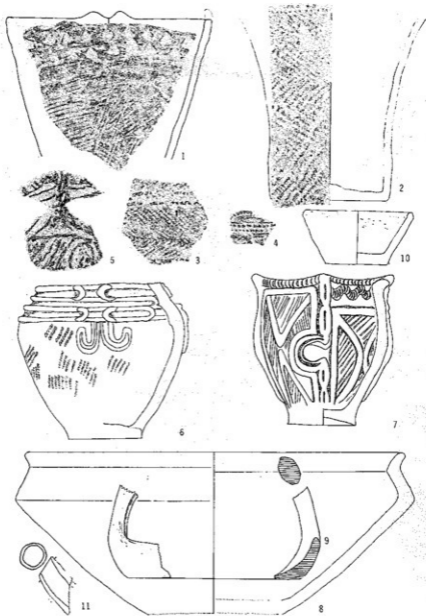
今回の調査で発見された土器総量は、整理箱にして約50ケに及ぶ。その90%は第Ⅱ地区出土の縄文中期に属するもので、残りが第Ⅰ地区の縄文中期末～後期、弥生式である。遺物整理が未だ半分も終らず、復元可能土器も一・二実施された程度であるので、本節ではその復原を述べざるを得ないこと、あらかじめおこわりしたい。

(1) 縄文前期 (図版第12, 第7図1~5)

現在のところ縄文前期土器は図示したもののみである。時期的には第7図5の諸磯B式が最も古い。浮線文ある深鉢の口縁部破片で、一般的には、この突起上に彫刻による目、鼻、口を付す獣面把手となるが、本例にはなにもない。この期特有の雲母を含んだ焼成中位、赤褐色の土器である。第Ⅱ地点Cトレンチ表土中から検出、混入と考えるとよいであろう。

1~4はほぼまとまって第Ⅱ地区第3号住居址床面附近から出土し、発掘当時より注目されたものである。1は推定口径20cm、高さ20cm程度の単純な中形鉢の破片である。平縁の口縁部に2ケ1対の小突起が4ヶ所に付けられ、その直下4cm巾に三角形彫刻文が二帯めぐり、以下胴部は横乃至斜行する竹管による粗い条線文で埋められている。三角形彫刻文からほぼ前期末(乃至中期初頭)として良いであろうが、余り条線文などの在り方から類例は周辺に求めがたい。土器表面にはすゝの付着、及び表裏面に虫喰い状のしみが目立つ。焼成・胎土とも良好。2は頸部以下が復元できた土器で、1と同一地点から発見された。底部から外反して口縁部にいたる単純な鉢形で、大きさもほぼ1と同程度であろう。頸部以下底部までの羽状縄文をみれば前期中葉と思われるが、わずかに残る頸部の連続爪形文からみて1同様前期末としてよいであろう。北安曇郡松川町ネズミ穴桜沢遺跡に類例がある。焼成・胎土とも良好で黒褐色を呈す。3は羽状縄文を地文として、結節状浮線文を胴部に2条1対で間隔をあげ施したこれもまた前期末の特色をもつ土器である。胎土は小石を混じりゝ悪いが焼成は良い。4は無文地に連続爪形文を結節状につけており、

第7圖 縄文土器実測圖と拓影—前期・中期—



1~3に較べるとやゝ薄手、明るい褐色の小破片である。3・4とも1・2同様の断片的な位置を与えてよいであろう。

この4点が第3号住居址床面直上から発見されたことは住居址との関係の面で重要な鍵をもつが、発掘時の所見では床面上よりやゝ数cm上の他とちがう黒土層中に含まれていたようである。

(2) 縄文中期 (図版第12~第15, 第7図6~10)

第II地点の主体となる土器で、第I地点からも少数発見されている。他の中期遺跡と同じく、多量の土器片、住居址の複合など、発掘時点でさえ、中期と総括しなければならぬ節、土器の出土状態は雑然としており、層的变化を明確にすることはむずかしい。前述した如く莫大な資料のごく一部しか整理しておらず、各地区での比較検討も不可能なまま図示した土器を中心に略述したい。

典型的には加蓋利B式が最も多いようであるが、復元可能なものは第1・2号住居址の埋蔵2ヶ(図版第12の上段)程度で大半が器坂式である。この理由は本遺跡でも周辺の同期遺跡にみられた「土器だまり」がD地区から発見され、全掘できなかったにも拘らず、かつ発掘面積もさほど広くないのに、出土量総量の60%をこえるという結果に起因するであろう。

「土器だまり」というのは筆者が嘗て「熊久保パターン」と仮称したものである。即ち、縄文中期の遺跡(器坂期・加蓋利B各期)に往々にして認められる一種の土器出土(埋没)状態で、住居址の中に数10cmの層をなし土器片があたかも故意に捨てられたかの如く埋没していることをさす。松本平に限っても、塩尻市平出、同中原、同小丸山、東筑摩郡朝日村熊久保、同山形村三夜塚などに類例がある。今少し述べるならば、その範囲はほぼ一住居址の中心部数m四方、床面上数cmから、まるで土器片の中に土があるという形容も可能な程多量に発見される。中にはほゞ器形を復元できるものも多いが、半分から1/3程度のものが大半である。惜しむらくは、緊急発掘例が多く、この土器だまりを面的な方法で調査した例が少なく、形状そのものを的確に把握できない。わずかに平出、熊久保遺跡では、住居址との関連で出土状態を記録でき、ほゞ住居址の中心部周辺に積み重なって発見されることがわかったが、これら2例といえど、目立つ土器、例えば復元可能なもののみを原位置に残し、他の破片はすべて取上げた上での記録であって、真の「土器だまり」を示すものでない。今回も日時の関係で第II地点Dトレンチに発見されたこの種遺構はもっぱら土器採集的な方法のみで、全体的な追及は何も出来なかった。しかし、明らかに筆者自身が経験した熊久保・小丸山などと同じ状態であり、「土器だまり」と判断して間違いない。

ないものであった。いずれにしろ、こうした出土状態の中で、充分注意すべき層位的観察は実の所ほとんど不可能な状態で、(層序の目安もない程土器が充満している)出土土器の区分ができない。今までの例でも所需勝坂式・加曾利E式が混在しているが、たゞ注意すべきは、こうした土器だまりが、勝坂式が主体となっていることである。本遺跡でも第Ⅱ地点Dトレンチを除くと加曾利E式が大半であるのに対し、勝坂式はもっぱらDトレンチの「土器だまり」を中心に発見されている。土器だまりについてはあらためて資料集成を行い発表するので、こゝではこれ以上触れず、概略のみ記した。

さて、出土土器の記述に入りたい。図版第12は復元された土器、同第13は復元可能な土器、同第14、15は一部復元できる土器を示した。これらをもてみてもわかる如くその大半は勝坂式のものである。

6は口縁部から上を欠くはゞ完形のまゝ発見された土器で、器形を推定すればこの期には少ない一種の小型壺形となるだろう。器上半は粘土紐で横帯を作り、胴の一番張る部分4ヶ処に同じ粘土紐でハ状にかたどり、以下粗く浅い斜縄文を底部附近を残して磨きしてある。7も6同様の浅い4対の山形口縁を示す小型鉢形土器である。器全面に施文する傾向や胴部の区画文などに勝坂期の特徴があらわれている。12は外反した口縁部から胴部下辺で一たんの字に張って底部にいたるやゝ数少ない器形の中形の深鉢である。器全面の区画文とその円部に充填された斜縄文や大きな連続爪形文がよく調和し、豪放さより、むしろ繊細な感を与える。そういう点では17は同じ区画文土器でありながら、その文様構成は中期極盛期にふさわしい自由かつ適な点がみられる。しかし低い隆帯を伴う山形口縁部からは一對は垂直に、一對はL字状に無文帯を残し、その間を三角、或は四角で区画し、前者は連続爪形文と三又状印刻文、後者は沈線で充填する方法など、自由にみえながら一徹の規則制が見出せて面白い。口縁部の比較的外反する深鉢である。これに対し18は口縁部が内巻し、胴部が筒状になる深鉢だが、内巻する口縁には、縦に区画された口縁横帯文が頸部以下には爪形を伴う太い隆帯に区分された縦中心の区画文ある土器で、立体感には乏しいが中期極盛期の面影をみることが出来る。口縁横帯文といえは14が典型的で、太く深い半散竹管による沈線で二帯の横帯文を作り、頸部以下には無文部を広く残す区画が連続山形状線でわくどりにされている。無文部には輪積度がよくのこり、一方、口縁部には多分立体的な大把手が附加される頸であろう。13は内巻する口縁部を無文帯とし、頸部以下に刻目のある隆帯で区画する一種で、わずか山形に突起する口縁部に加飾する外、胴部にX状の隆帯を隆下させる特徴的文様構成がみられる。以上の区画文を主とする土器の一群は最も多い。勿論この中にも紙分できる土器があろうが、現時点では勝坂式として一括した

い。たゞ勝坂式の中にも諏訪地方の新道式に類似する古い部分に当たる類は少ないようで、むしろ勝坂期中葉から後葉のものが主体となるようである。16及びその右三片は同一個体の口縁部把手であるが、この種の立体的把手は大形のもの少なく、むしろ把手のみ取上げると次の加曾利E期の古い部分に大型のものが多い傾向にある。(21などがその一部である)

以上の勝坂期類似の土器は再述するが第II地点Dトレンチ内土器だまりからの出土が多く、他のA～C・E・Fトレンチ

第8図 縄文土器埋蔵実測図(1:5)

は断片的資料で、大塚破片も少なかった。しかし加曾利E期の資料は多いが、提出できるものは概観不十分のため、22・23に示したB・Fトレンチ出土土器の一部と第8図と図版第12の上段に示した24・25の2ヶの住居址内埋蔵があるのみである。



24・25とも隆線による寿草文と内部の沈線というこの期特有の埋蔵で、24は口縁部と胴下半を意図的に欠き、かつ磨いて平らにしてある。多分口縁部は25同様の無文栴ある類であろう。文様的にはやゝ24の方が不規則でありかつ兩突文などを加えているし、器形約にも多少の異なりが認められ、強いていうならば24がやゝ時間的に古くないだろうか。両者とも巾、高さとも40cmを計る大形の埋蔵である。24が第2号址、25が第1号址出土。

この他の加曾利E期の土器は20～23にみられる如く、古いものから新しいものもあるが整理終了時には今少しく区分も可能であろう。特に20の磨消縄文手法につながる単純な深鉢土器は、中期末～後期初頭に位置し、先述土器だまりのDトレンチ内出土である点、「土器だまり」についての見解にやゝ新例を加えたわけで、加曾利E終末期の土器及び後述の

後期初頭土器との関連についての本遺跡での今後の検討が必要であろう。

最後に無文土器に触れたい。10は口縁11cm、高さ約5cmの鉢で、全面がよく研磨されている。それに対し8はくの字屈折の口縁部をとる大型浅鉢（推定、口縁36cm、高さ16cm）である。破片の中には8に近い土器は10数片認められる。この他単純な壺乃至深鉢をとる無文土器も多く、一般的に厚手、やや粗雑な作りである。9はその一部だけで、実例の作成に誤りがあるかと思うが、窓をもつ器台の一種であろうか。今のところが類例が少ない。多分器台は4つの楕形の空間と、橋状部分で支えられ、底面も大きくあき、現存部よりやや上で終るか、或は器上半部が連続するかの二種が推定される。時期的には器台の多くなる加曾利E期に属するものであろう。

以上、縄文中期の土器について略述したが、中信地方に多い同期遺跡、例えば平出・熊久保・洞・三夜塚等と比較して、特別な点は見出せない。

(3) 縄文後期 (第9・10図)

本遺跡における縄文後期所属遺物の中、土器片は、縄文中期のそれに比し、著しく減少の傾向をみせ、第2地区においては皆無に等しい状態であり、第1地区において僅かばかりの資料を得た。然もその中、完形を示す土器の出土はなく、いずれも破片に限られ、活用でき得る資料は更に少ないものとなった。また、層序等による後期所属土器の積極的な分類、編年の位置づけ等は望むべくもなく、他の遺跡同様、本遺跡にあってもその実態を明確にし得なかつた。ここでは、施文面による相違を主に、従来明らかにされてきた形式、編年の位置づけ等参考とし、分類を計りながらその個々について説明を加えたい。

第1群土器 (第9図1～32第10図48) 縄文後期初頭に位置づけられるものを採用し、施文面の相違から、これを更に3分類した。

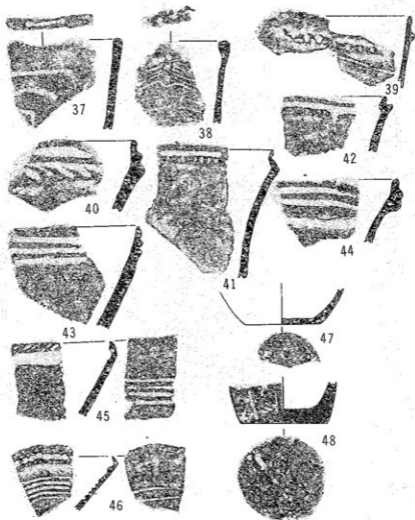
①類土器 (1～15・29・32) いずれも曲線状の沈線区画による、磨消縄文の施された土器である。7・8は共に口唇部を欠く口縁部破片とみられ、口唇直下に3条の幅広い沈線が横走り、頸部以下に沈線区画の磨消縄文を施している。7は平縁の、8は波状の口縁を形成するらしい。共に器厚5mmの厚手である。9は3条の沈線が斜走り、特徴のある沈線区画内に、磨消縄文を施す頸部破片で、内縁面の調整は良好である。13・15は同一個体とみられる破片で、13は口唇を欠く口縁部、15は頸部と推定され、器厚10mmの厚手づくりである。なお、13は楕円状に区画された沈線内を磨消し、間隔を置いて2～3段重ね、他は微細な節をもつ縄文を横走させている。14は器厚4mmの厚手土器の底部に近い破片で、13と同じ楕円状の磨消部を残す、黒褐色を呈し、内外縁面の調整よく、おそらくは注口

第9圖 繩文土器拓影—後期—



土器の破片であろうか。1～6・10～12・29・32は、いずれも太目の沈線が曲線状に走り
 区画内に断片縄文を残す類である。とくに1～3・9等は本類の特徴的な沈線区画を示す
 ものである。地文としての縄文はいずれも単型で、17例中、右傾するもの10例、左傾する
 もの6例、横走するもの1例で、その型は比較的細かい。

第10図 縄文土器拓影—後期—(1:2.5)



b類土器(16~28・30・31) 本類は直線的な沈線区画により磨消縄文を残す類である。16~27はいずれも口縁部破片で、17を除き口唇に平行して1条の沈線をめぐらし、口唇直下に1.5~4cm巾の無文帯部を残す。また、18・25を除きいずれも口唇は肥厚し10mm前後となり、頸部以下は5~7mm前後の器厚を示す。23は口唇上に小突起を有するらしく、24は黒褐色を呈して壁面調整よく、波状口縁となるが、他の11例は平縁となる。尚、24の背縄文は無節で、施文原体の相違する斜縄文の、右傾・左傾するものの接点がかがえる。16は区画内を磨消し、17は縄文を残す相違をみせ、26は沈線と磨消縄文の在り方が相違で、27と共に口唇直下の無文帯が巾広い。28は沈線間に背縄文が施される他は無文となり、30・31は同一器面であり乍ら、区画内の磨消縄文の走向が、それぞれ相違する。おそらくは施文原体の回転を意圖的に変え、文様を立体的に描出させたものだろう。地文としての縄文は、単節右傾するもの2例、左傾するもの8例、無節斜縄文右傾するもの2例、走向の一定しないもの3例であった。

C類土器(48) 本類に含まれるものとしては48のみである。器厚6mm、焼成よく茶褐色を呈する底部で、その径は5.8cmと小形である。朝代らしき痕跡をもつ惟、器面に右傾する半節斜縄文が全面に施され、磨消手法をもたない、縦方向の沈線区画がなされている。

第2群土器(第9図33~36第10図37~44) 本群は縄文後期前半に所属するとみられるものを一括した。33は緩やかな波状口縁部を示すもので、その頂部直下に円弧状隆帯加飾あり、隆帯上を平坦にして、その中心部に太い沈線を引き、上下接点には、器内に貫通せんばかりの深い右捻りの円形刺突が施される。口唇に平行して沈線が横走し、無文帯部を残すと共に、下部は全面に極細の無節縄文が縦に施される。口唇肥厚し10mm、体部器厚は6mmである。34は磨消縄文が摩耗のため残影的である。35は細い隆帯上に列点文が伴ないこれを8字状粘土紐が覆う加飾あり、36は同心円状沈線区画による磨消縄文が施され、これに刺口状の列点文が併用される。器厚5mmの注口土器割部破片であろう。37は波状口縁部で、ゆるい波頂部の口唇上を凹ませ、沈線の加飾を施し、口縁に平行して無文帯をもち、直線的沈線区画による磨消縄文を施している。器厚5mm、あらい砂粒夹杂物多く製成は粗である。38は内外面研磨、器厚3mmの薄手を示す波状口縁部。頂部に左右刺突された小突起をもち、その外面下部に微隆線と刺突によって表出する円形の連鎖文がある。5条の平行沈線文の他、痕跡的な磨消縄文が頸部以下に施される。39も器厚3mmの波状口縁部。口唇直下に隆帯列点文あり、その下部は微細な無節磨消縄文が施される。40~44はその手法をほぼ同じくする平縁口縁部である。これらはいずれも、口唇または口唇直下に1~2条の沈線をめぐらし、複合口縁的なねらいを意圖している。また、40・44は沈線下

に太い隆帯がめぐり、40はその上面を大筋に斜めの刻目を付している。42は複合口縁の下の口唇部に摩擦による痕跡的な列点文が残されている。41も同手法による列点文が配され、壁面調整良好である。43は沈線の他、無文となる。

第3群土器(第10図45~47) 本群は縄文後期後半に所属するものを取扱った。僅か3例の資料にすぎない。45は平盤口縁部で器厚は5mm、焼成よく色調は黄褐色となる。器の外面に口唇に平行して巾広い無文部を残しながら、やや密となる4条の沈線文を横定させている。また、器の内面には口唇直下に凹帯が圍繞し、口唇下に斜めの刻目文を添加している。46は平盤口縁部で器厚3mm、焼成よく黒褐色をとる。内外壁面を研磨しており、外器面に2条の沈線をはしらせ、内面の複合的な上唇を細く尖らせて、その尖端に軽い列点文を付している。また、下部唇との間は凹帯がめぐって、そこに刺突列点文を加え、更に口唇下には、5条の平行する沈線が圍繞する。47は器厚3mm、焼成よく黒色となる研磨土器の底部で、縄代釜をみせる。胴下部に横定する細く浅い平行沈線文が施される他は無文である。注口土器であろう。(大久保知巳)

2. 石 器

本遺跡から発見された石器は、石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨石・凹石・石皿に剥片石器・その他種類不明のものがある。打製石斧・凹石・磨石を除いて他は少く、縄文中期遺跡としてはやや全体的に石器が少ない傾向にあるが、これは発掘面積や、地点による時期のちがいで、即ち縄文後期や弥生期の地点が調査地域の半分を占めたことに起因しているかも知れない。以下簡単な説明を加えてみたい。

(1) 石鏃(図版第15の1~5)。5ヶのみでてる。第I地点2、第II地点3、石質は黒曜石が1、チャート3、ハリ賀安山岩1で、黒曜石が少ないが未成品と考えられる剥片では最も多いことが指摘できる。1は両脚部先端を欠く現存部長さ1.5cmの小型に類する黒曜石製であり、製作は良好である。5はやや粗い加工痕がのこり、えぐり込みも充分でなく完成品とはいいがたい。チャート製で長さ2.5cm。1・2は第I地点D13・11区耕土出土で所属時期は決め難い。3は有柄石鏃だが柄と両脚先端が欠損している。チャート製としては良く全面にわたって細かな加工を施してあり、中央部片側に小さな張り出部があって五角形態的な形状が認められる。現存長さ2.5cm。3はやはり両脚部を欠く無柄の硬品である。ハリ賀安山岩の全面を細かなタッチで良く加工し、3mm程度の厚さに仕上げている。現存長3.5cm。4はチャート製の両脚先端をごく少し欠く、ほぼ完形品である。5に較べると石質は同じだが加工は良く磨かれ、えぐり込みも丁寧に行なわれている。長さ2.2

cm。2・3・4は共に第Ⅱ地点出土で、2はE12区、3は第1号住居址床面、4はD5区床面で、ほぼ縄文中期に属する石鏃としてまちがいのないであろう。

(2) 剥片石器(図版第16の6~13) 検出された黒曜石・チャートなどの剥片に、多少の加工を行なって石器として使用可能なものが調査中や整理の段階で注意された。打製石斧や凹石で代表される縄文中期の石器の中に、特殊な剥片石器が存在することを諏訪地方で指摘しているが、ここでは一応現在までに抽出した2・3について触れておきたい。

6は鋭のきれいに残った縦長の剥片の基部を両側から細かいタッチでえぐりこみを付したノッチ状の石器である。しかし先端部に向う両側は刃部としての機能はやや認められないような一部自然面を残す部分もある。黒曜石製。第Ⅱ地点第3号住居址の床面出土、3.7cm。7・11は黒曜石製のサムエンドスクレパー的な石器である。7は断面がレンズ状になり、加工も完成品とはいえないが、やや基部が寛線となり、両面から加工を加えて、石鏃の未成品とはちがう。長さ2.6cm。11は表面のみやや細かいタッチで加工してあるが、裏面は第1次加工の痕跡のみで、刃部となるのは基部でなく両側らしく、その点7とやや異なるサイドスクレパー的な石器といえる。長さ2.7cm。7・11とも整理中検出し、出土地点が第Ⅱ地区としか明確にできないのが残念である。8は上半部が断面正三角形下半部も二等辺三角形を呈する、細長い黒曜石に比較的細かいタッチで全面に加工を加えた石器である。石鏃の未成品としては太すぎるし、形體的に石匙とはなり得ず、分類できない石器である。長さ4.5cm、第Ⅱ地区第3号住居址床面から検出された。9・10・13は未成品でわずかに加工痕を残す黒曜石(9・10)とチャート(13)、この程度のものはまだ数例抽出した。

(3) 石匙(図版第16の15~18、第16図8・9) 合計5ヶ出土。横型4ヶ・縦型1ヶであるが、横型のうち2ヶはチャート製の縄文前期に多い種類で残りの3ヶが中期特有の粗大な安山岩系統の石匙である。

15は長方形の中央につまみのある形で、刃部は片面からの加工のみ。チャート製、横巾4.2cm。第Ⅰ地点A2区新土。18もチャート製で正三角形の体部中央に大ききにつまみがついている。つまみ部のみ両面からレタッチを加えているが、他の面、特に底辺にあたる刃部は片面からの加工で、裏面は打製面をそのまま残している。全体の断面はS字状になる。以上の2ヶは前期に一般的な形態であるが、18はつまみの粗大化など、中期への傾斜が認められる。

第13図8は縦型の粗大な石匙で、刃部は片側のみレタッチが残っている。しかしつまみ部分のみ、やはり両面から加工を施している。粘板岩。図版第16の16は硬砂岩の粗大な横

型石匙。一部欠損するが中期特有の粗い加工痕が全面に残り、つまみと刃部にのみ再加工を施す。第Ⅱ地点D6区出土。横巾約8.0cm。同17は16と同形の完璧品である。片面には自然面が残る、一面に比較的細かな加工を加え整形もしっかりしている。刃部も両側よりレタッチして、石質の割には鋭利である。横巾10.2cm縦7.0cmの大型模型石匙である。第2地点B8区出土。以上3点はすべて縄文中期を主体とする第Ⅱ地点の検出にかかり、その所属時期もほぼ同時期としてよいであろう。

(4) 石斧(第11, 12区) 本遺跡における石斧は、打製石斧と磨製石斧があり、後者は第1・第2地区ともに各1点、前者は第1地区23点、第2地区72点を数える。

また、打製石斧の出土は、第2地区は、第1地区に比べ著しく点数が多いが、これは、調査したグリットの数の多いことにもよるが、やはり、縄文中期の特質といつてよさう。

	打製機形	分銅形	短冊形	不規則な形	磨製	総数
I地区	8 (6)	3 (1)	4 (3)	8 (5)	1	24 (15)
II地区	50 (18)	2 (0)	8 (5)	12 (8)	1	73 (31)

()の中は原石の表面をとどめるもの数である。

打製石斧

打製石斧の形態は、不規則な形態のものもあるが、原則的な機形・短冊形・分銅形の三形態に分類される。原石を打ち欠いて生じた剥片を、わずかに加工しただけの粗製の石斧が多く、原石の表面をとどめるものが第1地区だけで約63%、第2地区では約43%に及んでいる。剥片は、そのままでも、ある程度打製石斧の機構をもつものであるが、これに僅かの手を加え整形することによって、簡単に鋭い刃を具えた石斧になる。

1・14・15・18・20・21・23・25・27・29・35・40などは機形石斧の範疇に入るものだろう。しかし、その形状大きさは、必ずしも、一様ではなく、その製作工程にも違いがあるようである。1は、表面の一部に原石のままを残し、裏面は大きく割ったそのままを残し、形状を整えるために小打撃を加えている。頭部の一部が欠損しているが、打製石斧の名に値するものだろう。21・23・25・40などは、同形をとるが、やや小形でその多くは整形のための細かい調整痕を残している。14はさらに小形で、刃部に僅かの欠損があるらしい。厚手で柄などの用途には適するのではないだろうか。27・35は、その形状を異にし、

第11図 第1地区出土石器—打製石斧・磨製石斧



(I地区)

用途的にもやや異なるものではないかと思はれる。20なども他とその形状を異にし、類例に乏しい。

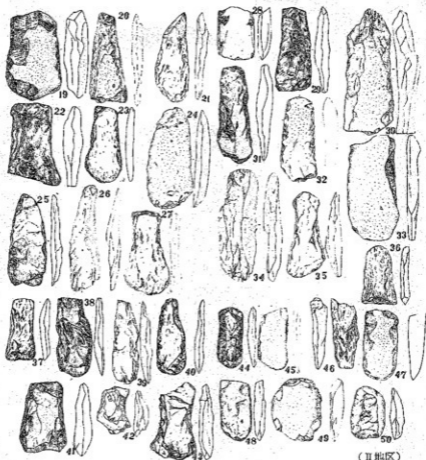
3・30~33・44・45・47などは、短冊形石斧の範疇に入るものだろう。これにも、大小の別・精粗の別がある。3は、一部欠損しているが、厚手で、実用的なものである。その形もよく行なわれている。31・32と30・33は、前者は精製品であるのに対し、後者は大形粗製品で33は一面は原石のまま、その調整も粗く、粗製品というべきで、その用途も異なるものであろう。

4・43は、分銅形石斧と名付くべきもので、その類例は少ない。4は小形ではあるが典型的な分銅形石斧というべきもので、頭部と刃部の区別があるらしく、前者は小形、後者は大形となっている。43はやや大形で、上述の区別はないらしい。

その他、多くの破損品があるが、やはり撥形石斧と思われるものが最も多く、分銅形石斧は極めて少なく、短冊形石斧も多くはない。49・50は、鎌器とでも呼ぶべきもので、49は原石から第1剥離による剥片の三方に調整痕を残すもの、50は、やや小形で二方に大きな調整痕を残して整形したもので、やはり、小形鎌器とも名付くべきものである。

打製石斧

第12図 第2地区出土石斧—打製石斧，磨製石斧，礮石



第11図12は、磨製石斧の頭部と思われるもの、やや、大形品に属する。両側は平面をなすので、断面は蒲鉾形を呈する。第12図28は、磨製石斧の刃部で頭部を欠損している。断面は、12と同じく、蒲鉾形をなすが、縄文中期の定形的な磨製石斧といえることができるだろう。

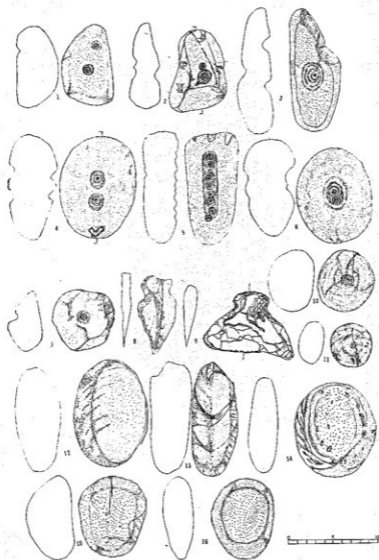
なお、打製石斧の多いことについて、考えてみたい。もちろん、ここに表われた数字はこの遺跡で当時製作され使用された石斧の全量ではないが、いかえると、「刃物をあまり使用しない、土掘り具を大量に必要とした」生活とは、具体的にどのような内容であったらうか。この遺跡の特質の一つを規定するものといえそうである。なお、本遺跡の石

種の石質は、硬質砂岩が最も多く、蛇紋岩がこれにつづいている。

(5) 凸石・磨石 (第13図)

総計43個 (砂岩35, 安山岩8)。大きさは径10cm内外。厚さ5cm前後。形は様々である

第13図 第1・第2地区出土石器—凸石・磨石

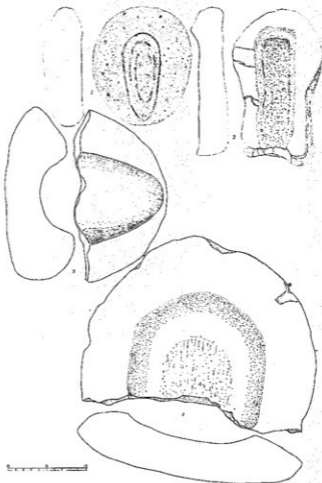


凹石出土別一覽表

トレンチ	深	厚	形	石質	トレンチ	深	厚	形	石質
II BT. 10E -55cm	7x4	3	楕圓形孔状面	砂岩	II FT. 9 -40	8x6	3	楕圓形孔状面	砂岩
II BT. 3E -65	10x11	4	楕圓形孔状面	安山岩	II FT. 10	9x6	4	扇形孔状面	?
II BT. 3E -65	9x10	3	長方形孔状面	砂岩	新土中	7x5	3	楕圓形孔状面	?
II BT. 6E -80	9x8	3	楕圓形孔状面	?	II FT. 6 -30	13x45	4	長方形孔状面	?
II BT. 7E -50	8x7	3	長方形孔状面	?	II DT. 5 -50	9x8	3	楕圓形孔状面	安山岩
II BT. 5E -50	13x6	5	棒状孔状面	?	?	9x7	4	楕圓形孔状面	?
II B8 -55	7x8	3	楕圓形孔状面	?	II DT. 3 -30	9x5	6	不整形孔状面	砂岩
II BT. 10 -50	12x11	3	?	?	II 2階基礎 -90	10x8	4	楕圓形孔状面	安山岩
II BT. 9 -50	9x5	6	長方形孔状面	?	II DT. 11 K.P.L内	8x6	3	楕圓形孔状面	砂岩
II BT. 6E -30	9x7	3	楕圓形孔状面	安山岩	?	9x7	5	?	?
II BT. 5E -30	8x8	5	円形孔状面	?	?	8x5	3	?	?
II BT. 11 -80	11x9	4	楕圓形孔状面	砂岩	磨石出土別一覽表				
II BT. 1E -50	13x6	3	長方形孔状面	?	II BT. 7E 4階基礎	7x7	3	四角形	砂岩
II BT. 5E P.L内	10x7	4	楕圓形孔状面	?	II BT. 1E -45	10x8	2	楕圓形	花崗岩
II CT. 9	10x5	5	長方形孔状面	?	II BT. 7E 4階基礎	10x6	4	長方形	砂岩
II DT. 24	10x8	4	楕圓形孔状面	?	II BT. 8E -55	9x6	4	楕圓形	?
II DT. 5 -50	9x6	6	長方形孔状面	?	II BT. 1E -50	12x5	4	棒状	?
II DT. 1 -70	8x5	3	楕圓形孔状面	砂岩	II BT. 1E -65	4x4	3	不整形(破片)	?
II DT. 3 -70	9x6	4	?	?	II DT. 11 P.L内	9x7	3	楕圓形	?
II FT. 10 -40	6x3	4	?	?	?	9x6	4	?	?
II FT. 9 -40	6x6	4	?	?	?	11x8	3	?	?
II FT. 9 -35	10x8	3	三角形孔状面	?	?	11x8	4	?	?
II FT. 9 -46	11x7	4	三角形孔状面	?	II DT. 2	8x7	4	長方形	?
II FT. 8 -38	11x5	3	長方形孔状面	?	II DT. 5 -50	5x5	2	球形	?
II FT. 10 -45	7x4	4	楕圓形孔状面	安山岩	II F. 12 -35	7x7	5	円形(破片)	?
II FT. 9 -90	10x8	5	楕圓形孔状面	?	II F. 10 -40	8x4	4	半円形	?
II FT. 9 -90	12x6	3	長方形孔状面	砂岩	II DT. 6 -30	13x6	4	長方形	?
II FT. 9 -45	11x6	4	?	?	石皿出土別一覽表				
II FT. 8E -45	8x6	2	楕圓形孔状面	?		20x22	7	楕圓(楕圓)	安山岩
II FT. 9 3階基礎	10x6	3	長方形孔状面	?	HD -90	32x12	10	(,)	?
II FT. 10 -45	10x8	4	楕圓形孔状面	砂岩(磨石用)	II FT. 8 -80	17x9	5	長方形(破片)	砂岩
					II BT. 12 -40	13x13	6	楕圓形孔状面	安山岩

が、角のとれた川原石を用い、楕円状に近いものが最多で何れも型に手頃な形。凹みの穴は径1cm~2cmで楕円状に凹み、深さは0.5cm内外のものが普通である。この凹み穴は石の変換面に穿たれたもの28、片面凹み穴のもの14である。概して凹面に使用穴をのこすものが多い。第13図6は表裏面に凹み穴あり、側面は磨石を兼ねていたと考えられる研磨痕がある。1は砂岩、片面に2孔あり、背面はカマボコ状に湾曲し手で握って押えるには好都合である。2は砂岩製川原石を用い凹面有孔、片面の1孔は大である。3は砂岩、長方形に近い川原石で凹面に有孔、径は2.5×2cm、深さ0.8cmで大形に属する。4は扁平硬砂岩表裏2個ずつ有孔。5は長方形、砂岩製品、凹面有孔であるが1面中央部は縦に1列につながって8個の凹孔が並んでいる。6、7は砂岩製、何れも手頃な自然石を利用している。

第14図 第2地区出土石器—石皿(1:5)



(6) 石皿(第14図)

総計4個、大形1、中形1、小形2である。

小形2個は完成品であるが、他の2個は何れも凹面の半分が欠損している。第14図1は扁平な川原石(安山岩)の表面を楕円状に浅く彫り凹

めた程度のもの。しかし皿面は滑らかでよく研磨されて光沢に富んでいる点から見ると使用頻度は大であったと考えられる。この径13×13cm、厚さ6cmの石面に長さ11cm、巾4.5cm、深さ1cmといった超小形石皿の主目的はどこにあったものだろうか。2は扁平で握りのよい硬砂岩の自然石の面を16×5cm、深さ最深部1cm、最浅部は縁辺に向かって片口形に開く箇所で0.5cmの現状の凹みを有する石皿である。凹面は多数の打痕の存する小凹凸の起伏の激しい連続である。荒削りで作製途上とでもいった感じのものである。これは藤石等による使用磨滅痕の極めて少ないことから見て握り潰し用器として充分活用されなかったのか、あるいは打痕による小突起が凹面一円に及んでいることは敲き潰す作業が主となったことに起因するのか、何れにしろ一寸姿った皿面である。

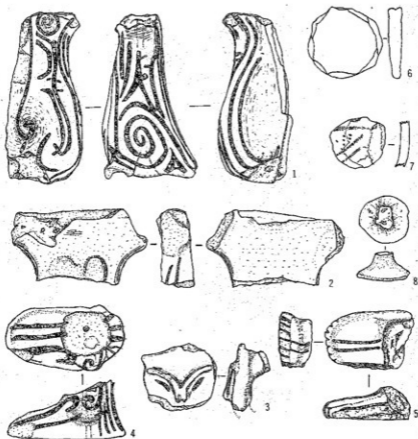
3は安山岩製で中央部で半截されており全形は判明しがたい石皿である。皿面の形は深く長楕円形である。辺面はよく研磨されて握り使用頻度は大であったろう。石材は平滑な自然の川原石を使ってある。4は大形品で安山岩製、平板の川原石を使って深さ1.5cmの皿面は中央部分のみよく磨滅しておりよく利用されたものであろう。

3. 土 製 品 (図版第17・第15図)

土製品はすべて縄文期に伴うものと考えられるものばかりである。土偶5、円盤状土製品2、他1の計8ヶである。

1は首部左半身を欠損する中期特有の尻張り土偶である。胴部は正面・側面・裏面の三面とも太い沈線による渦文や曲線文で充填されている。乳房は右側のみわずかにふくらみ正中線は一本の沈線で表現され、やゝふくらんだ腹部のへそで溝壟になっている。胸部からやゝくびれ、器下半の腰部で広がり、安定した姿を示す。腰部にあたる裏面は所謂ハート形を示すものであろう。首部と腰部のほぼ中央に小孔があるが、後者は単なる小孔というより、焼成時に安定のためやや太い孔がある。なおこの種小孔は貫通している例もあるらしいが、本例の左半身の欠損部でみると途中までしか棒状の痕跡が認められず、何本かの棒状品が焼成時に挿入されていたことがわかる。故にこの小孔を懸垂のためとするより焼成時の必要条件と考えたい。ちなみに2の場合は首部になく右腕に貫孔しない小孔が1ヶ、5の足には裏面に貫通してない小孔が垂直に1ヶあるのみで、4にいたっては足首の中央と足裏に小孔があるが、共に貫通はしていない。1の場合の首部の小孔は勿論、首をささえるためのものであろうか。2にないのはこの種土偶の首がさほど大きくないためと解釈できないであろうか。

2は扁平な板状の体部をもち、両手を水平に拡げる土偶体部の一部のみである。首・腕



・胴下半をそれぞれ欠く。わずかに胴の両側面に二本の縦の沈線がある外、まったく文様はない。乳牙も剥落して痕跡をとゞめるのみである。胎土に雲母を含む中形土偶であろう。

3は首部だけの破片であるが、両側も欠損が目立つ。隆線による眉と鼻の表現、その下に沈線が目をつし、鼻孔も二つ刺突されている。断面でわかる如く、胴部とはこの一部でつながる形状をもつらしく、顔部裏面の上半に突出部があるが、今は欠損してそれが機状

になるのか、「まげ」的なものの表現かさだかでない。本例のみ出土地点を不明としてしまったが、中期後半の土偶とすべきか、或は後期とすべきか、やゝ判断に苦しむ。(第I地点は後期、第II地点は中期なので)

4・5は足の部分である。共に1同様太い沈線による文様が付されている。特に4はがん丈に作られ、わけても「くるぶし」が実によく表現されている。この足(左足)から推定すれば全体像は相当大形品となるであろう。しかし、どうもこの踵足部の出土例はあるが(近くでは東筑山形村)、完形品に近い体部までの例は筆者には知見がなく、むしろ、こうした土偶は、「足」のみの土偶と考えた方が良いのではないかと感じていた。それは土偶が呪術的意味をもち、何かこわされて捨てられるか、埋葬される例が一般的との定説があるため、つい足や首・胴体のみものを初めから欠損品と断定してしまった観がないだろうか。足なり首なりを作り、それを打ちかくということもありえないか。いずれにしろこうした観点から出土状態などを再検討したい。

5は4に比較するとやゝ小さく、文様も少いが、爪先が刻線によって表現されている点面白い。両者共足の裏は表面と同じくらい丁寧に作られ、平坦で安定している。

6・7は円盤状土製品。現在まで図示した2ケのみである。6は底部破片利用のもので周縁を大きく打ちかいている。それに対し、7は胴部の彎曲した部分を利用し、図上部には加工のあとが余りない。表面には沈線と縄文による中期的文様かわすかに残る。両者とも円盤としてはやゝ不明確であるが、一応こゝにとりあげた。

8はスタンプ状土製品であろうか。先述した土偶足部の裏面と同じく、底面は比較的よく平坦に磨かれており、周縁も欠損というより、磨消的なもので、つまみ部がないのが惜しまれる。文様は何もない。把手の一部ではないかと指摘された方もあるが、形状・つくり方からスタンプ状土製品として取上げた。

以上8ケの土製品のうち2ケの円盤を除いては、すべて粘土・焼成は良好である。またすべて第II地点の縄文中期に属する部分から検出された。

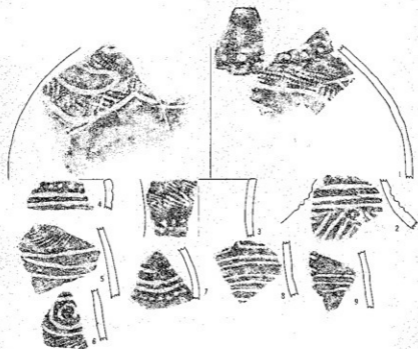
第2節 弥生式遺物

1. 弥生土器 (図版18・19, 第16・17図)

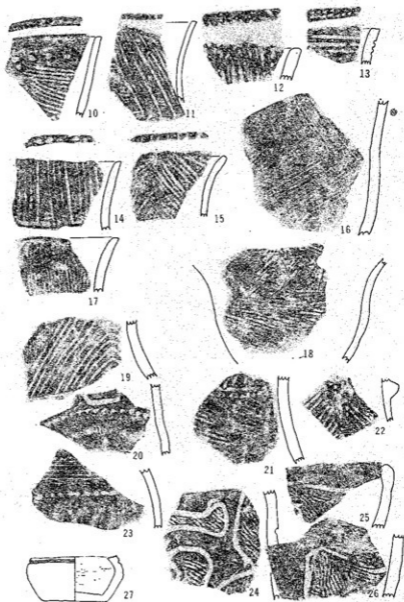
第1地区では、Dtの第20区以南に、殊に、第24・25に多く出土し、Ct第12区からも、おそらく、単独出土ではないかと思う状態で出土している。なお、第2地区Ct第18区でも条痕文土器が少量出土している。

図版第18・第16図1は、大形壺形土器の破片、口縁部から胴下部付近までのものであるが、つづかないので、頸部以上の形態は具体的にはわからない。しかし、破片によると、小突起のある口縁で、幅の狭いものらしく、僅かの口縁部をもって頸部につづき、頸部が強収約し、胴上部が張って、最大径約39cmで、次第に細まって座部につづくらしい。推

第16図 弥生土器拓影(その1)



第17圖 芥生土器拓影（その2）



定による高さは35cm前後である。文様帯は、頭部から胴上部にあって、太い沈線と縄文が目立つが、磨消縄文の手法をとっている。文様は、極めて特徴的な入組風の文様をなし、横山城・緑ヶ丘両遺跡に類品がある。頸部に刺突文のあるのも珍しい。2は、壺形土器の頸部と胴上部の一部破片、太い沈線と縄文帯の組合わせをなし、沈線の交点にボタン状の貼付文を持ち、他にも類品があって、境塚などにもみられるものである。3は、口径10cm壺形土器の口頸部破片で、無節縄文が素体を横に回転して施され、頸部に爪形文が加えられている。4は、口縁部破片、刺突文と太い沈線が加えられている。刺突文は1に類する。5は、太い沈線と縄文の組合わせではあるが、1とはややその手法ないし効果を異にするもの。6は、太い沈線が円文となるもので二重ないし三重の円文らしい。7は、爪形文をもつ点、3に類する。8・9は、やや細目の沈線文である点、上述のものとは異なり、図版第19・第17図19・22、図版第19の29に類する。緑ヶ丘遺跡などにも類品がみられる。20～23は、細かい爪形文をもつ点、お互に相似ており、22・図版第19の29は、小突起があって、境塚・黒沢川右岸両遺跡などの同類のものに先行するものか。第17図24～25は、無節縄文と太い沈線文の組合わせによるもの、24は、1の文様に似ている。

次に条痕文土器(図版第19の10～12・14～18・24～28、第17図10～18)について述べる。図版第19の10、第17図10は、口唇下に刺突文があって、その下は櫛状工具による条痕文風の沈線文が横ないし斜目に施され、口唇に押し文が加えられている。12・14・17は、縦に条痕文風の沈線文の施されたもの、12はやや類を異にし、12の口唇外側に刻目、14の口唇に刺突文17の口唇下に細かい爪形文が加えられている。11は、横の綾杉文、15は、縦の綾杉文でその趣向を異にするが同類とみるべきだろう。いずれも、口唇に刻目をもち、10・14とともに薄手である。なお、16は、甕形土器の胴部破片で、横の綾杉文が施されている。

18は、小形体形土器の胴部破片、胴上部の径は約11cm、胴上部には縦形の綾杉文、下部には横ないし斜目に条痕文風の沈線文が施され、器面に煤煙が付着している。図版第19・第17図23・14にも煤煙が付着し、第16図9には、部分的に朱が塗られている。

第17図27は、太い沈線文の痕跡と木葉痕などから弥生土器と考えたものであるが、果たしてどうであろうか。器形も、上体を欠くので、壺形土器なのか甕形土器なのか明らかでない。器面を研磨し、その焼成などからも、縄文土器というても通りそうである。内面は朱彩らしい痕跡を残している。

なお、土器底部2個あって、ともに、無文で、以上の土器片のこの地域における古式弥生土器の一つであることを意味している。塩尻市片丘横山城、明科町緑ヶ丘両遺跡、さらに、山形村壺沢遺跡出土品に対応するものではないかと思われる。

第4章 結 語

中宿平総合開発の企画に基づく用水路の開設が遺物散布地付近を通る予定であるということで、波田村大字下波田麻神地帯の緊急調査を実施する。

秋の収穫期を控え、普通日に作業をつづけねばならないので、甚だ、困惑したが、そのままでは、ただ、いたずらに、遺跡の破壊を招くおそれがあるため、止むなく、記録保存を行なう発掘調査を引受けることになった。

発掘調査が、かかる状態で行なわれることは、甚だ、問題の多いことで、「文化財保護法」の精神にそわないばかりか、むしろ、それを害うものであろう。緊急調査という名の下に遺跡の破壊が行なわれることは、極めて、残念なことといわなければならない。

発掘調査は、水田地帯と畑地帯を連んで進められる。それぞれの地点における成果とその意味について、簡単にふれてみよう。

第1地区（水田地帯）

緩な傾斜地を均して水田とした地であるため、52cmのDトレンチは、低い田・次の田・高い田と三段に分かれ、地層も、必ずしも、秩序をなしておらず、殊に、その傾向は、高い田に多い。遺物の出土状態も、その意味では、不自然さがみられた。

しかし、一応、0～5・8～13両区では、最下層の褐色土層とその上層の黒土下層は動かない層と観察され、その境界付近、殊に、黒土層下部出土の後期ないし中期縄文遺物は、この地点における遺物と思われた。それに対し、19～21・23～26両区では、上述黒土層の上部が削去され、その付近にみられる中期遺物は、むしろ、2次の堆積によるものと理解された。つまり、高い田が最も地形の変化を受け、低い田・次の田で中期から後期に及ぶ生活のあった時には、縄文人の生活の場ではなくて、水田を作る時に黒土が一方で削去され、他方で黒土と一緒に黄土が堆積されて水田の床がつけられたと理解されたのである。

第11区及びその付近に、焼土があり、ピットが露われ、土器・石器の出土するものも、右の事情に因るものであった。この地点には、整穴住居もつけられたと思われるが、褐色土層への切り込みが少ないこととその後再び住居が営まれたのか、田作り作業によるためか住居の輪郭を不明瞭にしてしまい、僅かにその存在を指摘できるにとどまった。

第1地区で、特に注意されたのは、むしろ、中期弥生土層の存在である。松本平南部の

西郷山麓における古式弥生土器が注意されはじめたのは、山形村の三間沢川沿岸の埴輪遺跡を嚆矢とするが、その後、同村下竹田北竹原第2地点で、土器底部に布目瓦底のあるものが発見されて、扇状遺跡（埴輪）が三間沢川を渡って西郷遺跡（北竹原第2地点）と関連のあることが実証された。その後、出土地点は、未だ、猶もないが、同村内に条痕施文の壺形土器の発見があり、さらに、唐沢遺跡の調査で条痕文土器を含む古式弥生土器の資料が増加し、埴輪遺跡に先行する弥生遺跡の存在が確認された。今回発見の弥生土器資料は、波田村内にも類似遺跡のあることを示し、さらに、松本平の弥生土器の起原を知る鍵の一つは、この西郷地帯にあることも明らかとなった。要するに、上波田・下波田・下原・森口南原などの諸遺跡の弥生土器に先行するものである。

第2地区（畑地帯）

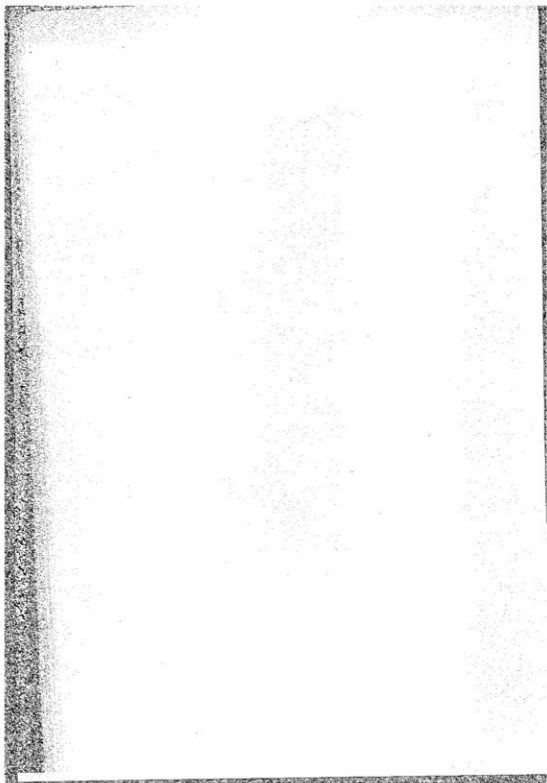
A～Dトレンチ設定の結果、中期縄文期の第1～第7号住居址の存在を確認したが、時日の関係と覆土の多いために、その全貌を明らかにできたのは、第3号住居址だけで、他は、それぞれ、部分的に露われたにすぎなかった。

この地区で注意すべきことをあげれば、

1. 第1～第7住居址が発んど切り合って、中期特有な住居址のあり方を示していたこと。
2. 第8号住居址は、第1・第3住居址の間に介在し、地表下約50cm付近に焼土層と勝坂式土器の破片が同一面上に多く存在するので、これを、褐色土層に設けられた住居址と考えたのである。この住居が平地式なのか、竪穴式なのか、肉眼では明らかにできなかったが、仮りに、当時の生活面が黒土層であったとするならば、黒土層から褐色土層内へ若干の掘り込みがあったと考えても不思議はない。中期の住居のうちには、褐色土層に床面があるものもあるのではないかとされているが、これも、その一つではないだろうか。多くのローム層への竪穴住居のあるなかで、それが意味するものは何かという問題の解決もあるが。
3. その時期は、縄文中期の中ごろから終りごろまでであること。
4. 完備した唯一の第3号住居址は、その規模及び炉も小さく、床面に前期末土器もあって、その時期のものと思われたのに、柱穴から加蓋利E式土器が出土し、中期末の住居と思わざるをえなかったこと。
5. 第6・第7住居址では、その床面付近に幾個体もの縄文土器が押し潰された状態で燻黒して発見された。その土器の多くは、勝坂式に類するものであるが、なかに加蓋利E式に類するものもみられた。このように、縄文土器が焼屋と思われるところに燻黒してい

る事実について、樋口昇一氏は、「期久保パターン」と称しておられるが、これも、それに類するものである。樋口氏によれば、塩尻市平出・小丸山岡遺跡でも経験されたというが、筆者の経験でも、塩尻市中原遺跡でもそうであった。

6. 第1・第2号住居址では、加曾利E式土器（中ごろ）を埋髪としてあるのが発見された。（藤沢宗平）



図版第 1

第1地区発掘状況(その1)

中段の調査



上段のグリット



上段グリットの東側断面



図版第2

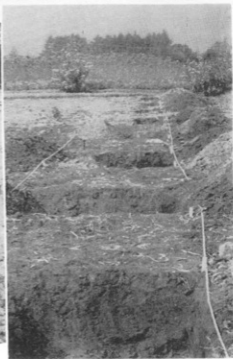
第2地区発掘状況(その2)



Cトレンチと第1地区遺留



第1号住居址の左に複合して第4・第3(手前)住居址が露われる



Cトレンチの偶数区の調査

図版第3

第2地区発掘状況(その3)



D
トレン
チの
調査

第1号住居址の暖穴炉
その傍から石皿が
伏せられて出土





第3号住居址

第6(上)・第7(下)号住居址





第2号住居の埋甕



第1号住居の埋甕

図版第6

遺物出土状態(その一)



土偶胴部



土偶頭部



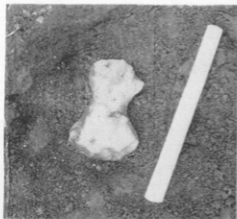
土偶足部

図版第7 遺物出土状態(その2)

打製石斧2個出土



両頭石斧



短冊形石斧

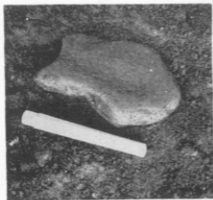


図版第 8

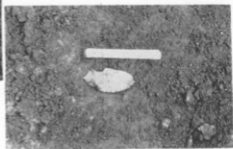
遺物出土状態(その3)



石片とスクレパー出土

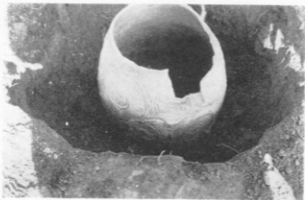


石片





第7号住居址の焼土の上に潰れて出土



第1号住居の埋甕

図版第10

遺物出土状態(その5)



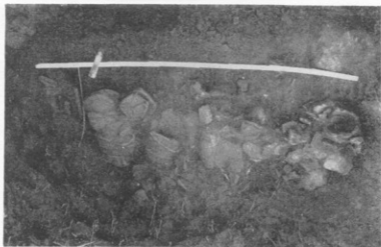
第7号住居址床面上



第7号住居址床面上

図版第 11

遺物出土状態(その6)



第7号住居址の床面上

中・縄文土器形を残して出土



縄文土器破れた状態で出土



図版第12

縄文土器(前期・中期)



24



25



6



7



12



2

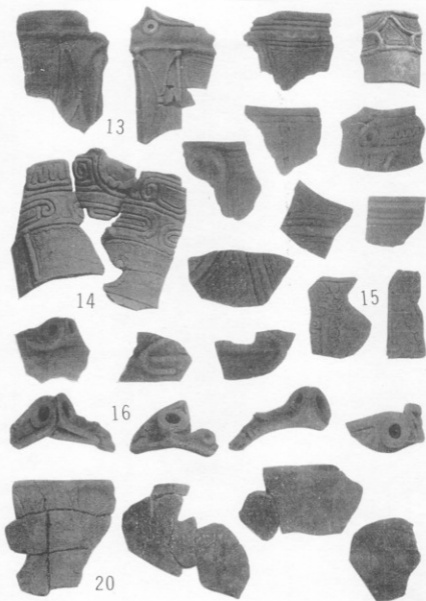
図版第 13

縄文土器(中期)



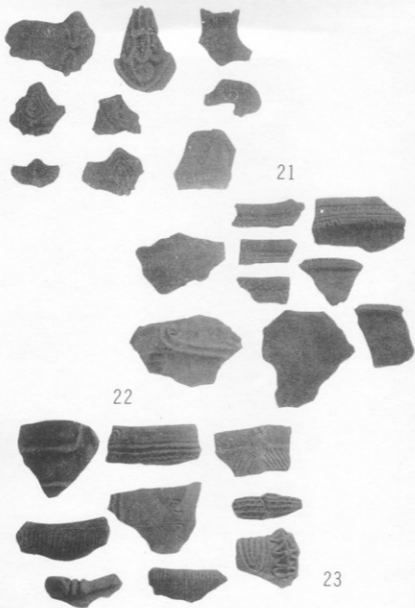
图版第 14

鬲文土器(中期)



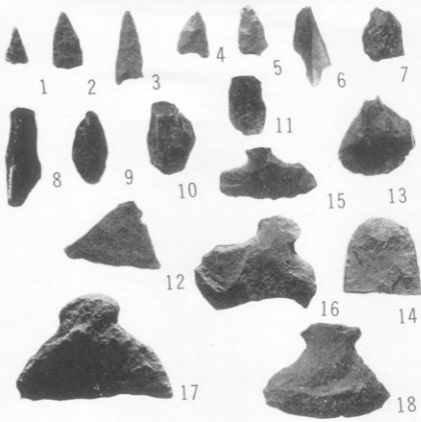
図版第15

縄文土器(中期)



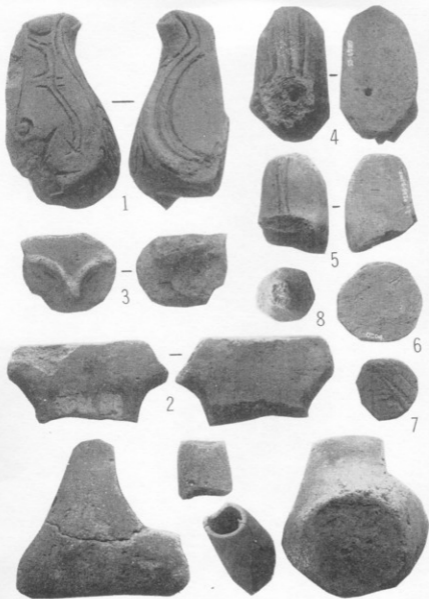
図版第16

石器(石鏃・スクレパル・石匙)



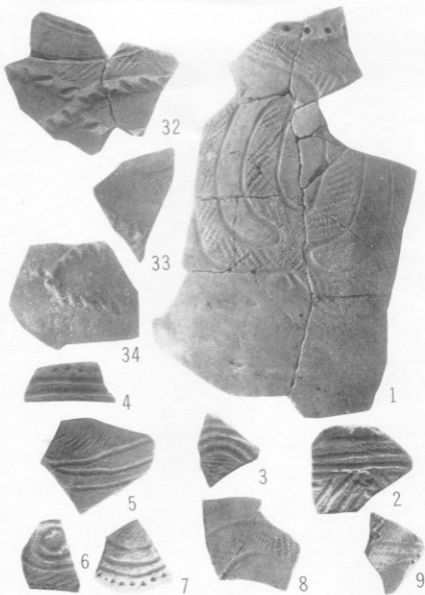
図版第 17

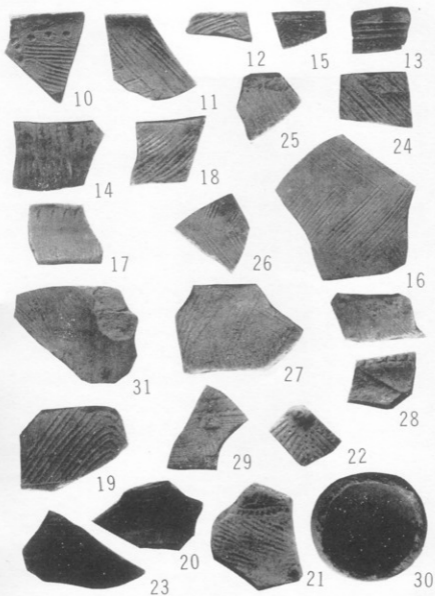
土製品（土偶・円盤・スタンプ状土製品・注口・底部）



図版第18

弥生土器 (1~9・32~34)





長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡
緊急発掘調査報告書

昭和47年3月31日

著者 藤沢宗平他
発行者 関東農政司中信平農業水利事業所
長野県東筑摩郡波田村教育委員会
印刷所 松本市巾上4番24号
信州印刷株式会社

(非売品)